

創刊121年

幼児の教育

2022~2023

冬

— since1901 —

子ども学の源流を次世代につなぐ

第一号

第三三三巻



かんでももらいたいけれど、
やっぱりこわいな。

子どもの情景

写真

子どもの情景 1

目次 まと

幼稚園の朝に思う 2

特集

倉橋惣三生誕140年

今また考えよう、倉橋の子ども学 4

保育を語り、倉橋の保育論を実践に

つなげていく

— 保育研究会「惣三会」の歩みと今 — 4

《座談会》

上垣内伸子・横谷厚子・新堀和子・
本村真弓・浜口順子

5

《アーカイブズ》

「保育の要諦」 坂元彦太郎

1 倉橋惣三先生と附属幼稚園

三、戦後のこと

— 「幼児の教育」第64巻第11号

(1965年) から —

25

実践

私の保育ノート

気持ち

浦木智子

28

パパ・ばあば・じいじの育児日記(4)

— パパの巻 —

保高一仁

32

連載

「育ての心」で語りあう

〈 動画を囲んだDX時代のカンファレンス〉

Vol.8

保護者同士がつながれる場

大竹みどり・城田龍・平田真大・
山下晃平・久保健太

36

視点

単身赴任世帯の子育てについて

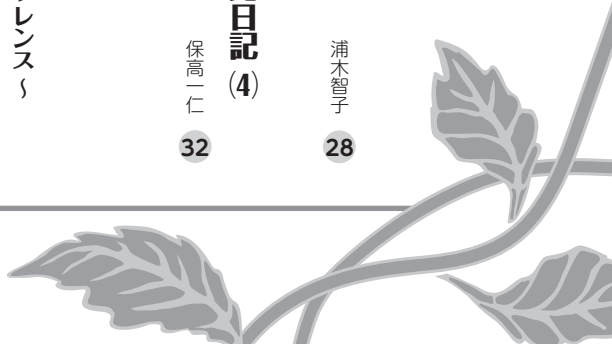
八田剛

42

国境を越えた保育の学び in ベトナム

松本雄一・戸田雄介

46



目次

表紙の図柄は、1901年に創刊された弊誌第1号の表紙図柄（荒木十畝・画）をデザイン化したものです。

文化

鎌倉おもちゃ屋物語その16

黒須和清

51

探究

遊び・イメージ・関係性(1)

― 誘導保育の原点に見るイメージの役割と意義

西隆太郎

59

目録

『幼児の教育』令和4年総目録

60

子ども字のひらば

イベント・メディア情報

「倉橋惣三研究会」をお茶大で開催しました

読者投稿・編集後記 他

61

まど ■ ■ ■ 幼稚園の朝に思う ■ ■ ■

私は副園長という立場で、登園してくる親子を玄関で出迎える。寒い日も、強風の日も、大雨の日も、子どもたちは幼稚園に向かってやって来る。時に抱っこされたり、親の背中に隠れていたりもするが、「幼稚園に今日も来てくれた」とどんな姿でもうれしい。また、起床してから出かけるまで、そして幼稚園までの道のりを、励まし、手伝い、声をかけ連れて来た保護者にも頭が下がる思いである。

子どもたちは、小さな手の中の花や虫をそっと見せてくれることもある。「おはよう」と言葉で表現しなくても、チラッと私の顔を見てくる人もいる。幼稚園の入り口で出会っているいろいろな姿や気持ちに、「幼稚園の朝が来たね。安心して担任の先生のところに行つてね」と思う。

そして、倉橋惣三「幼稚園真諦」第三編「1. 幼稚園の朝」の一節、「朝において、先ず十分に、自由の感じを、子供にもたせることが最も大切である」とすべきです」を思い浮かべる。幼稚園の朝は、一人ひとりの自由を大切に受け入れる時である。入り口に立つ私は、子どもの思いをさえぎることなく、どの子どもが幼稚園の生活に自然と入り込めることを願い、園舎内に向かう背中を見送つてくる。

(高橋)



倉橋惣三生誕140年 今また考えよう、 倉橋の子ども学 4

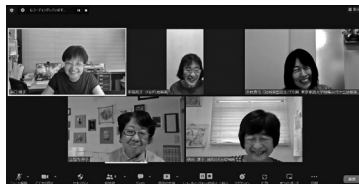
明治15（1882）年に倉橋惣三は生まれました。生きていたら今年140歳。保育・幼児教育の世界では今も、いや今こそ「倉橋惣三」の名があらためて思い起こされていると言えるでしょう。子どもが自分らしく生きられる生活、子どもの心もちを大切にすることこそ人間を育てる教育であることを、日本の保育・幼児教育の基礎に据えた人物です。本誌は今年、倉橋生誕140年を記念して、彼の子ども学を見つめていきます。

今回のテーマ

保育を語り、倉橋の保育論を実践につなげていく — 保育研究会「惣三会」の歩みと今 —

倉橋惣三生誕140周年記念特集最終回は、坂元彦太郎がきっかけとなって形成された、幼稚園保育者が自ら学びあう研究会「惣三会」を今に引き継がれている方々による座談会です。坂元は、倉橋惣三から戦後日本の幼児教育制度刷新を託された人物。埼玉県の間を中心に、坂元を通して、現場の保育者や保育研究者たちの間には、倉橋の保育観を実践に活かそうとする息吹が呼び起こされたのです。

豊かな語り合い、公開保育や合宿、モノづくりや見学など、学びと遊びが交錯する、保育者による主体的で新鮮な勉強会の雰囲気が伝わってきます。



アーカイブズ

「保育の要諦」 坂元彦太郎

1 倉橋惣三先生と附属幼稚園 三、戦後のこと
— 『幼児の教育』第64巻第11号(1965年)から —

座談会

保育を語り、倉橋の保育論を
実践につなげていく

— 保育研究会「惣三会」の
歩みと今 —

上垣内伸子 (大学教授)
槇谷厚子 (幼稚園園長)
新堀和子 (幼稚園教諭)
本村真弓 (幼稚園園長)

(司会) 浜口順子

「惣三会」とはどのような集まりか

浜口 今日には「惣三会」のメンバーの方にお集まりいただきました。倉橋惣三の名前を冠するこの会は、長年、保育者の勉強会の集まりとして続いてきています。まず、この会の歴史からお聞きしたいと思います。

上垣内 惣三会は昭和49(1974)年からなので、始まりから約50年になります。今は埼玉県を中心とした私立幼稚園・こども園の先生方、特に担任をもつ若い先生方が多く集まっていますが、そもそものスタートは坂元彦太郎先生でした。

坂元先生は、戦後、倉橋惣三と一緒に、学校教育法に幼稚園を入れることに尽力された方です。坂元先生が十文字学園女子短期大学(現在は4年制の大学。埼玉県新座市)の学長に着任された頃、近隣の幼稚園で活躍されていた東京女子高等師範学校(以下「女高師」。お茶の水女子大学の前身)出身の「美登利会」の方々が、保育実践に倉橋の考え方を活かしていこうとされていました。そこで、幼稚園教育要領の作成にもかかわってこられた坂元先生を中心として惣三会が始まりました。坂元先生が『倉橋惣三・その人と思想』(フレーベル館 1976年)の出版を準備されてい

上垣内伸子(十文字学園女子大学教育人文学部教授)
槇谷厚子(学校法人希望学園浦和のぞみ幼稚園園長。惣三会事務局)



▲上垣内伸子氏

る頃で、坂元先生にも倉橋のことを現場の先生と語りたいというお気持ちがおありだったのではないのでしょうか。そんなこと

「惣三会」という名前をつけて始まった研究会です。私は平成3年からなので、30年くらい惣三会に参加させていただいています。

浜口 「美登利会」というのは女高師の保育者養成課程を卒業された方々の同窓会ですね。例えばどのような顔ぶれですか。

上垣内 当時十文字の学長室に集ったのは、木の実幼稚園園長の野辺繁子先生、志木幼稚園園長の松本光先生、東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園主事でご退職後にわかかのび幼稚園園長になられた川崎千束先生、音羽幼稚園園長の清水光子先生、十文字の附属幼稚園主

事の桑原久子先生など。美登利会の先生が十文字の実習園には多くいらつしやったのです。ひなぎく幼稚園副園長の浅沼千代先生、片柳幼稚園園長の橋本道子先生も加えて、埼玉の幼稚園中心の集まりとなったようです。幼児教育学科の教員であった江波諄子先生、立川多恵子先生も参加されました。

浜口 勉強会はどのような雰囲気だったのでしょうか。

槇谷 野辺繁子先生、奥村郁子先生（黎明幼稚園主任）、矢作邦子先生（木の実幼稚園主任、後に第一鳩山幼稚園園長）が計画なさっていました。園長先生方の研究会から始まったものが、だんだんと現場の若い保育者たちも保育を学ぶ、語る会になっていったのではないかと思います。十文字の神沢良輔先生もいらしていました。

野辺先生が、当時文部省のお仕事をされていた柴崎正行先生を惣三会に連れてきてくだ

新堀和子（学校法人浅沼学園ひなぎく幼稚園教諭。惣三会事務局）
本村真弓（幼稚園型認定こども園東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園園長）
浜口順子（お茶の水女子大学）



▲榎谷厚子氏

さったのが平成4
(1992)年、浦
和のぞみ幼稚園の
新園舎ができてす
ぐの頃です。以来、
浦和のぞみ幼稚園
が会場となり今に

至っています。それ以前は、大御所な先生もたくさんいらしたので、私が参加し始めた頃(昭和58、59年頃)はとても緊張していました。今は若い先生がたくさん来てくださって、自分の保育を自分の言葉で語る会になっていると思っっています。柴崎先生や上垣内先生も参加してくださることにより、私たちの保育を理論的に裏付けていただける会になってきたのかなと思っっています。

上垣内 二つの会が合流したんですね。埼玉の先生方が神沢先生をお呼びして、若い先生方も参加して新しい教育要領の中でもっと

学ぼうというのが、「指導計画研究会」。それと、坂元先生を美登利会の園長先生方が囲んでの、サロンのような勉強会。坂元先生、神沢先生が引退される中で今の惣二会になった。最初の頃は土屋とく先生や園長先生方もいらしてくださいました。でもだんだん若い先生中心になっていった。柴崎先生が「僕は、保育は大御所といわれるようなすごい人でないといけないので保育だと思っっている。そのために若い人が自分の保育を語りあう場所が大事だと思っ思う。この研究会はそういう会にしたい」と言われてましたよね。

浜口 先輩保育者と若手の保育者が重なりながら、保育研究者も交わって保育研究のバトンを手渡してこられた歴史を感じます。

上垣内 最初の頃は倉橋惣三を直接知っている先生方の会でした。坂元先生はもちろん、美登利会の先生方は倉橋惣三の授業を受けた

筆記ノートをお持ちでしたから。私は堀合文子先生にノートのコピーを頂きました。倉橋からじかに学んだ方が、倉橋の保育論を戦後の幼稚園教育要領の内容に重ね合わせ、それぞれの園の実践がどう位置づいているのかを坂元先生と勉強されようとした会だったのだと思います。今は倉橋惣三から直接学んだ人は誰もいませんが、子どもがお父さんお母さんから話を聞かせてもらうように、先輩方から話を聞きながら今に至るとい感じです。

平成元年の幼稚園教育要領改訂の頃

浜口 惣三会は、昭和から平成にかけて大きく幼稚園教育要領が変わる節目をまたいできたわけですが、現場に動揺はなかったのでしょうか。

新堀 当時の幼稚園では、行事を大切に指導計画が立てられていた記憶があります。その頃は「一つの計画の中に6領域が含まれてい

る必要がある」といわれており、6領域が指導の拠り所であり指導方針の根幹である

という雰囲気でしたが、徐々に、日常生活の中にある子どもの主体性に目を向け、子どもの気持ちに寄り添い、子どもへの接し方を見つけていこうという考え方に変わっていく過渡期でした。私は、そんな時期に、「子どもの主体性を重要視した指導方法を他の先生方と情報交換できる惣三会に参加してみたら？」と誘われて参加するようになりました。

浜口 6領域から5領域に変わっていく境目を、話しあって乗り越えていらしたんですね。

上垣内 平成元（1989）年に森上史朗先生と高杉自子先生を中心に26年ぶりに大きく幼稚園教育要領が変わったわけですが、倉橋



▲新堀和子氏

の保育論がこの幼稚園教育要領のそここに示されていると感じ取られたのではないでしょうか。

浜口 倉橋惣三が一線から退き、戦後復興の中で幼稚園が急増し、「教える」感じの保育も増えていきました。その傾向への疑問が出てきて、昭和の末に、倉橋を見直そうという流れが現れてきます。

上垣内 幼児期にふさわしい生活、遊びを中心とした総合的指導、一人ひとりに応じた援助。この基本は明確に倉橋の保育論が反映されたものだと思うので、惣三会の先生方にはすつと入ってきたのではないのでしょうか。

惣三会に参加するって

浜口 本村先生が惣三会を知ったのはどういうきっかけだったのですか。

本村 私は、卒論指導をしてくださった柴崎先生が誘ってくださいって、惣三会に参加し始

めました。現在私の勤める東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園の初代主事の川崎千束先生が、惣三会の最初の時期にかかわられていたことが

後々わかって、ご縁があったんだなと感じたところでした。本園で展開されている保育も、子ども一人ひとりの主体性を大事にするところ、いろんなことを施し過ぎず、適度に、ということを大事にする保育が脈々と受け継がれているのは、やはり倉橋惣三先生の教えから派生したところに位置づいているのだなと、あらためて感じているところです。

現在の惣三会の活動

浜口 現在の惣三会の活動はどのようなものですか。



▲本村真弓氏

楨谷 以前は1か月に1度程度、年間10回ほどでしたね。コロナ禍の状況になってからは1年間休止状態でしたが、昨年度からリモートで再開することができています。年に6回ほどに回数は減ってしまったのですが、とにかく自分の保育を自分の言葉で語ることを大事に考えています。最後に上垣内先生がまとめの、心に残る話をたくさんしてくださり、折々に『育ての心』からの文章を紹介して、実践と結び付けてくださるような形で会を進めています。

上垣内 『育ての心』から1〜2編取り上げることは、坂元先生の時代から続いていることです。

楨谷 本村先生は都内からなのですが、ほとんどが埼玉県内の先生で、今は15園ほどの園が参加しています。子どもたちの主体的な遊びや一人ひとりの発達を大切にしているということが共通の思いかと思えます。園で何人

か申し込みをして、ご都合のつく先生が参加する形です。飛び入りで別の園の方がいらしたりすることもあります。定例の会のほかに、講演会や先輩保育者に聞く会、コロナの前は年に1度の公開保育も行っていました。

新堀 メインの参加者は3歳・4歳・5歳児クラスの各担任です。こども園の2歳児の担任は3歳児のグループに入ってもらいます。そのほかにはフリーの先生、園長のグループもつくります。グループごとに自分たちの保育に関して共有したいことや悩み事を話しあい、グループごとにまとめを発表してもらいます。そして最後に講師の上垣内先生が総まとめをさせていただきます。参加者は、リモートになる前は毎回45人ほど、リモートになったからは35人前後で推移しています。

上垣内 このスタイルは柴崎先生がつくってこられたスタイルです。浦和のぞみ幼稚園に集まっていた頃は、年齢ごとに2つずつ、計

6グループになり、土曜日の午後の2時から4時までたっぷりと話していましたね。

年齢別に集まるので顔なじみになるんですね。それで、「この間のあの子どうなった？」と話が弾み、つながっていく。園を超えて共通している姿もあるので。誰かから話を聞く会ではなくて、自分たちの保育をひたすら語り耳を傾け、気がきが交差しあうような、たっぷりとした話し合い。6グループが発表した記録は次の会で配られます。柴崎先生と私は先生方の話を聞いて、年齢ごとの特徴やその時期に共通する事項などを少し整理したり、理論的なことに結び付けていくような話をしてきました。この話し合いが惣三会の中心です。

公開保育の様子

上垣内 公開保育は、「仲間の保育から学ぼう」と毎年、会員になっている幼稚園のどこかが

担当して1学期に行います。休日の土曜日に、その園のお子さんに登園してもらって公開保育をします。

浜口 普段の保育とは別の日にするんですね。

上垣内 そうです。保育界には公開保育から学ぶという、連続と続く歴史があると思うんです。以前はホールに保育室をつくったりしたこともあったのですが、今はもつと自然な感じですね。

槇谷 かつては堀合先生の実際保育も見せていただきました。1クラスだけ登園してきて、堀合先生が初めて会ったその園のお子さんたちと心を通わせながら保育をするという。

浜口 出前保育を惣三会でやっていらしたことがあるのですね。

槇谷 私が担任していたクラスでも何度かやっていただいたことがありましたが、ハラハラドキドキしながらも、今思えば本当に貴重な経験でした。

上垣内 堀合先生からたっぷり学ばせていただきましたが、今、惣三会でやっていることは、自分たちの保育を自分たちで学びあうということです。担当する園の先生方は緊張されるとは思いますが、気心の知れた、いつも話しあっている仲間への公開だからこそ、その信頼関係のもとで皆がそこから学ぼうという思いで続けてきた公開保育です。

槇谷 その日の午後のうちに少し話をします。皆さんお互い認めあうような、もちろん質問の形で意見などが出ることもあるんですが、全体としては、お互いにこれから前向きに頑張りたいという感じかと思えます。

上垣内 子ども中心の話し合いですね。「あの時のお子さんってこういうふうにしたかったんじゃないか」とか。公開保育であれば別の人が聞いていたり見たりするんですよ。「あの子、あの後あそこに行っていましたよ」などと話がつながるので、担任はもちろんの

こと、皆の子ども理解が深まっていく時間。「じゃあ、こういうかかわりもあったよね」とか。

公開保育後、次の月の定例会でもう一度振り返るんです。私はビデオを撮らせてもらっているのですが、そのビデオを見ながらもう一度、「こうだったね、ああだったね」と話しあうのです。そうすると、自分が参加していなかったクラスのこともわかってきます。

新堀 次の月の振り返りでは、公開保育の後の子どもの様子まで追跡して学べます。

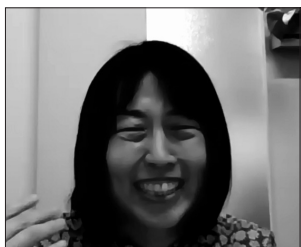
浜口 確かに子どもを軸に話していけば、お互いにとって面白い、新しい視点が見つかる話し合いになりそうですね。

上垣内 担任はずつと一人の子どもについて回することはできませんが、仲間がその後の姿を見ていて話を聞かせてくれる。「そうそう、〇〇ちゃんってね……」という話をするのは、楽しいことだなと思います。

若手保育者の変化

浜口 集まりを通して、若い保育者の変化を感じることはありますか。

本村 私が新卒の頃は、周りはベテランの先生ばかりで同世代の同僚がいませんでした。惣三会は同世代の仲間もいて、保育の悩みを出しあえる場でほっとできました。「こういうふうになっているよ」という他園の実践も聞きながら、「自分の保育はこれでも大丈夫」と励まされ、心強かったです。自園だけでは知ることができない保育実践や自園の園文化の中心だけでは気づかない視点を毎回参加するたびに吸収できる喜びがありました。若い頃は、惣三会には勉強しに行くというよりも話を聞きに行くというほうが



強く、楽しみでした。同世代の先生方に会えるといううれしさは大きかったです。

浜口 楽しみなんて、すてきですね。

本村 惣三会は、講義式の研修会ではなくて、身近な先生方の語りに触れられるというのがありがたかったですね。浦和のぞみ幼稚園の先輩の先生方の話を聞いて、こういう方法もあるのかと発表会のアイデアを取り入れたことも覚えています。

槇谷 本村先生のようにすぐに楽しいと思える先生は珍しいかもしれません（笑）。最初はドキドキして、大きな海に投げ込まれているような感じかと思えます。でも参加することで、自分の保育を語る経験については鍛えられると思います。自分の保育を振り返ってよく考えないと語れませ



んし、自分の保育を自分の言葉で語れる機会
って少ないと思うので、恵まれているなと思
います。

上垣内 榎谷先生ご自身は、最初に惣三会に
参加した頃はとうだったんですか。

榎谷 私は指導計画研究会の時代（現在の惣
三会の前身）からなので、緊張の連続でした。
野辺先生はテキパキおっしゃるので、その厳
しさの中で研究会がおつくうだったりするこ
とも確かにあったのですが、今ではその厳し
さもありがたいですね。

3歳児クラスの担任を初めてしたのは平成
5年ですが、「3歳ってこんなことを考えてい
るんだ」とか「こんなことをするんだ」とか
よくわからない状態で、失敗も、こんなこと
を言わなくてよかったなということもたくさ
んありました。でも、自分の保育を語ってみ
て、自分の保育を考えていくことは大事だと
思いました。そのうちに語ることが楽しくな

ってきて、他の方の話を聞くことも楽しくな
って、子どもたちに早く会いたいと思うよう
になりましたね。

上垣内 そうね。「すぐまたうちのクラスの子
どもたちに会いたくなつた」というのは、よ
く先生方から聞く言葉です。

榎谷 モヤモヤしていたんだけど自分の心
が整理できるというか、吐き出すことで、他
の方に聞いてもらったり、聞かせてもらった
り、いい循環になつていてと思います。惣三
会は、学ぶだけではなくていろいろなことを
出しあえる場なのかなと思います。

上垣内 新堀先生、ひなぎく幼稚園の先生方
はどうですか。

新堀 やはり最初は、新卒の先生は先輩の先
生たちの意見を聞くことが多いですが、惣三
会で自分の意見をまとめたり自分の言葉で発
表したりする経験を重ねていくと、自ら発信
することができるようになるものだなとつく



づく思います。惣三会では他の人の意見を否定するという考え方はなく、人の発言に真剣に耳を傾けてくれる参加者ばかりです。その中で、他の保育者からアドバイスをもらえるので、自分のやっていることを自分で反省し、自分で工夫する糧になり成長できるのでしよう。参加した若い先生の動き方が変わってきたと思うことがあります。若い先生の中には「初めは、泣いている子がいると、手をつないだり抱っこしたりして、物理的な接触で安心感を与えようとしていたけれど、個々の子どもに目を向け、その子にあった見守り方があると気づくことができた」という話をしてくれる人もいて、惣三会に参加して子ども

への接し方を学んだり、自分の言葉で意見を言えるようになっていく姿に成長を感じます。

「先輩保育者に聞く」会

上垣内 定例の語り合いのほかに、「先輩保育者に聞く」という回があります。一年の前半には公開保育をして、後半の2学期か3学期には、長年保育に携わってこられた先生の話聞かせていただくのです。柴崎先生、野辺先生が幅広い人脈の中で、「この先生のお話を聞いてみたいな」という先生を連れてきてくださいました。保育の話というよりも、なぜ保育者になったか、どうしてこういうキャリアを選んできたのか、保育者としてどのように成長してきたのかなど、ご自身のライフヒストリーを語ってくださるような話ですね。自分が保育者としてどのようにこれからやっていこうかとか、この仕事を自分の生涯の仕事と定めてやっていこうとか、キャリアをスタートさせていく段階の先生にとっては貴重な機会だと思います。案外皆さん、初めから

保育者になろうと思っただけじゃなくて、そこがまた興味深い。

本村 吉村真理子先生はとっても人間味があって楽しいお話でした。

浜口 なるほど。ほかにどのような方が？

上垣内 藤野敬子先生、後藤節美先生、神長美津子先生、岩崎婉子先生、庄籠道子先生。津守眞先生にも来ていただきましたし、お茶の水女子大学の附属幼稚園からも宮里暁美先生、吉岡晶子先生、杉浦真紀子先生に。身近な仲間である惣三会の先輩保育者にもパネルディスカッションのような形でお話ししていただきましたね。

夏合宿

浜口 夏合宿という企画もあるそうですね。

楨谷 蓼科の野辺先生の別荘（仙境都市）での研修は平成7年から10年ほど続けました。星がとてきれいな所でした。十文字の湯ノ

丸山荘にお邪魔したこともありました。

上垣内 柴崎先生のご

出身地、軽井沢の星野温泉にも。小さいお子

さんがいらつしやる先生はお子さんと一緒に

参加していました。1泊または2泊で。

浜口 それでも勉強会を？

上垣内 勉強もするけれど、自然を楽しむことが中心。いろんな素材でクラフトを作ることも。東京家政大学の造形の先生をゲストで呼びして、皆でオカリナを作ったこともありました。合宿だから時間をかけて取り組みやすい時間です。遊ぶんです。

楨谷 宿泊でなく、日帰りになってからも、いわむらかずおさんの美術館に行ったり、秩父の森に間伐体験に行ったりと、楽しい企画もしました。



新堀 JAXAにも行きましたね。

上垣内 宇宙飛行士体験をして、宇宙服を着た写真を暑中見舞いにしてクラスの子どもたちへ送った先生もいらっちゃいました。

浜口 遊んでいる先生の姿を見せるっていうのも面白いですね。

上垣内 夏にそうやってすっかり楽しい遊ぶ場もあって、そして保育に戻っていくんです。ドキュメンテーションをつくろうとか、いろいろやりました。楽しいですよ。2、3月に「来年どうする？」と計画を立てるのです。

浜口 楽しいから続くのでしょうね。

私の好きな『育ての心』の文章

浜口 倉橋惣三の『育ての心』をヒントに語りあうことがあるそうですね。

上垣内 定例会では毎回、『育ての心』から一つ二つの文章を紹介するようにしています。『育ての心』って、私たちが読んでいて、す

とんと胸に落ちる文章が多い。『幼稚園真諦』も大事な本だけれども、『育ての心』にぜひ出会ってほしいなと思います。坂元先生のように、そこに託された倉橋の意図を話すことは到底できませんが、現職保育者である先生方は保育とのつながりで捉えているとお話ししてくださるので、かえって紹介した私のほうが勉強させてもらっています。

浜口 皆さん、『育ての心』の中で特に好きな文章とかありますか？

本村 なかなか一つに決められないのですが、「六月」という文章。

私の園で、雨が降り出した日、園舎の軒先で雨のポタポタ落ちる所に、年少さんが担任と一緒に鍋やかんと並べていました。いろいろな音がするのを、



テラスにみんなで座って楽しむんです。その日以来、雨が降りだすと軒先にいろんな容器が並ぶようになりました。夏の保育中は掲示板で保育の様子をお知らせしていますが、昨日の保育中も、雨が降りだしたときに、年中になった子どもたちが「雨の音をたくさん集めたい」と、軒先にタライや鍋を並べて、じっくり眺めている様子が紹介されていました。

(掲示板の写真を見せながら) 皆で見ているの、いいですよね。「雨の音がしなくなったら」と園庭に飛び出して行く様子が描かれていたことがとっても良いと思いました。最近は何の日は軒先にあらゆるものが並び、雨が強く降るとカンカンカンと高い音が園内に響きま

す。
浜口 雨の音を集めるというので、タライにたまるようにするのかと思ったら、裏向きなんですすね。

本村 そうなんですすよ。

浜口 それで雨の音を「集める」と言うんですすね。「六月」の、どのフレーズがいいですか？

本村 「雨だって、おとなが教えなかった

ら、子どもには少しも苦にならないものであろう。」という最後のところ。子どもたちは「内からの光」、「小さい太陽たちは、いつだって好天気だ。」

うっとうしいものという価値観を大人が落とさえしなれば、子どもたちは雨も楽しい日となり、雨の日も感性を育てる一日になる、というのは保育をしていて感じます。

楨谷 「ひなた」と「日かげ」もいいですよ。うちの園には大きな桜の木があるんですすね。春には花が咲いて、小さなサクラノボが落ちてきて、秋に紅葉して、葉が落ちてひなたが



▲浜口順子氏



できる。夏は日かげがありがたいのです。『育ての心』の中で、日かげの大切さがあると。

「私たちはつい、ひなたに目を向けてしまいがちなんだけれども、やっぱり日かげって大事だとつくづく思っています。年に1度、ハートフルサッカーといって浦和レッズの人やサッカーを教えに来てくれて、年長組は楽しみにしているんです。それはとても暑い日だったのですが、コーチに来ていた落合弘さん（かつてのサッカー日本代表）が、「この日かげはいいね」と褒めてくださったんです。日かげは大事だとあらためて思うことができました。

私はよく『育ての心』から引用してプリントにして配布するのですが、「ひなた」と「日かげ」もよくお家の方に紹介しています。ひな

たに目が向きがちですが、子どもたちを支えていく日かげの役割も忘れないで大事にしたいと。

新堀 私は今、フリーという立場で、保育室に入れないお子さんと遊んだりしています。何十年も前になりますが、私が園に就職したときに当時の理事長が、園長室に「子どもの心になりましょう」という書を額に入れて飾っておられました。この言葉は大事に見つめていこうと思っています。

フリーの立場になった今は「みんなの先生」という立場で、あっちで困っていれば相談に乗ったり、こっちで手が足りなければ手伝ったりしています。今、実はとても気になるお子さんがいます。いたずら好きで、鍵に興味があり、玄関の鍵をガチャガチャといじります。「それは大事な物だからさわっちゃダメよ」と言われているから、やってはいけないのはわかっているのですが、大人の目を気にしな



から玄関まで行って、私と目が合うと「わかってるよ」という感じで、またクラスに戻って

いくんです。私からは「ダメよ」という言葉ではなく、「先生も見ているよ」と視線で合図を送ると、それに気づいて戻っていくというかわいらしさ。ダメと言われていても、やりたくなってしまふ子どもの心はかわいいなと思います。

『育ての心』の「ひきつけられて」は自分の中では一番心に残っていて、子どもの心になつて気持ちに寄り添いながら、一人ひとりを見ていきたいなと思つて保育をしています。

上垣内 『育ての心』は優れた保育者論であるとよくいわれます。読むことで、保育者が自らを振り返る省察をもたらしてくれるという

か。でもそれだけでなく、倉橋自身が実によく子どもの心を知る人だとも感じます。まずは子どもをよく見なさい、子どもから保育は始まりますよと。「子どもの心になりましょう」は、『育ての心』の土台のところに息づいているメッセージかもしれませんね。

時に厳しい『育ての心』

上垣内 私は『育ての心』を大学1年生のときに読みました。本田和子先生が、入学式後の集まりで、「よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。」（「小さき太陽」）の文章を暗唱され、それに感激して早速収録されている『倉橋惣三選集』を買つて読んだのです。その時、ドキッとしたのが「とげ」。

「わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。もとより自分で心づかぬ時のことである。まさかに、心づいてそんなこ



とのありようはないが、ちらと光る目、ふと出る言葉、思わず動く気分、自分でも心づかない峻烈はないか。」

この文章が強烈で、『育ての心』で倉橋は結構厳しいことを書いていると思いませんか。

本村 「詫びる心」もそうですよね。

上垣内 そうそう。「いきいきしさ」も好きな文章だけれど、最後に「鈍いものは死滅に近いものである。」って書いてあるわけ。

「親切」が好きで学生にも紹介するんだけど、これも最後は「理論がよく分かりませんが、これも最後は「理論がよく分かりませんが、これいい、経験が足りません」といい、気の

きかない性分という。

その実は親切が足りなかったのではあるまいか。少なくとも、一点不親切がまじっていたのではあるまいか。(略) わたしは屢々しばしば自らぞつ

とする。」と書いてあるわけですよ。だから、すぐ、「ああ」と思うところと「ドキッ」とするところがある。保育をしながら惣三さんを思うときで、このドキッとするあたりはいかがですか？

本村 上垣内先生は厳しさとおっしゃったのですが、倉橋先生ほどの先生でさえこういうことを感じることもあるのだということに逆に勇気もらいます。「まだまだだな」「あれができていなかったな」と自信がなくなる瞬間が保育をやっていると常にあって、落ち込むこともあるのです。「未完な状態である自分自身」を正直に振り返る倉橋先生の言葉に、「まだまだだけれど私も頑張ろう」という気持ちになります。「とげ」などは、読むと、あの時子どもをとげとげしい目で見ていたかも、とドキッとすることがあります。

上垣内 保育をされている方にとっては、倉橋は先生方の傍らにいる人なんですね。どこ

か他の場所から保育者に何かを伝える人ではなく、保育する傍らにいる人なんです。

本村 「自ら責める心」の終わりの「親はいつでもわが子に済まないと思っっている。先生もきつと同じことであろう。」という言葉も3月を迎えるとうとうしても考えます。保育をしていると、常に完璧ではない自分、足りない自分とずっと向き合うこととなります。それを保育者仲間と、足りないところを互いに補いあい、支えあえるような関係が築いていけるとよいのかなと思います。

また、倉橋先生の本を読んでいると、「やり過ぎない」ことを考えます。子どもたちと共にある人は常に自分を振り返りながら、子どもの力を伸ばすためにすることが、手を出し過ぎない、引つ張り過ぎない、バランスを常にもっていることが大事だよ、ということが文章の根底にあるような気がしています。

『育ての心』の子どもは今も生きている

新堀 倉橋自身が子どもたちとよく遊んで、子どもたちの生活を見て、一緒に生活していましたよね。100年以上前に書かれた本の中に出てくる子どもの姿に、今、目の前にいる子どもの姿を重ねるたびに、昔の子どもも今の子どもも原点は同じだと思いつながら、「子どもをよく見なさい」という倉橋からのメッセージを受け取っています。

浜口 100年前の子どものみただけでも、そういうことを感じないですよ。

新堀 話が少し飛んでしましますが、昔、野辺先生に「あなたたちが今育てている子は21世紀を生きる子どもたちよ」と言われたことがあります。当時は「21世紀を生きる子どもとはどういうこと？」と思いましたが、21世紀になつて電化製品やパソコン、通信機器の発達など、大きく生活環境が変わっても、

『育ての心』を読んでいて「こんな子いるよ。こういうことあるよ」と感じるのが今でもあり、子どもの本質というものは時代を超えて不変なんだと感じます。

上垣内 『育ての心』は子どもを映し出し出してくるんですね。子どもがここにいるんですね。津守先生が、OMEP（世界幼児教育・保育機構）の世界大会に『育ての心』の「廊下で」と「飛びついてきた子ども」を英訳されて持っていかれて。そうしたら、よその国の保育者も「わかる」と。時代を超えてという話が今出ましたが、時間だけでなく空間を超えて、異なる文化や歴史、社会の中で生きる子どもの姿からも保育者はわかる。

浜口 すともと腑に落ちるんですね。不思議ですよ。こんなに短い文章で。最近、全く違う業種の人に「飛びついてきた子ども」の話をしたら、「すごい」って言っていました。普遍性があるのでしょうか。

保育の中で倉橋惣三を思うとき

植谷 「とげ」などを読むとドキッとするといい話もありましたが、私たちはドキッとすることを避けてしまうことがあるような気がします。だからこそ、時にはドキツとして背筋を伸ばして、ということが必要だと投げかけてくださっている気がします。倉橋惣三は、愚直、真面目で、下心なく、子どもに対してまっすぐに向き合っていることがすごく伝わってきます。こうなっただけほしい、がつい先に出してしまいがちだったりするけれど、素直な気持ちで子どもと向き合うように、背筋を伸ばさなきゃと思うこともあります。

かみしめて読むとその時々、若い頃と最近とでは感じ方が違うと思います。この頃私は本当に背中が曲がってきたらしくて、3歳の女の子に「先生、背筋ちゃんと伸ばさなきゃだめよ」と言われて、「あーそうなんだ」

なんてね。気をつけなきゃなと自分を振り返ることもありますし、子どもたちにもちゃんと見られていることもつくづく思います。背筋を伸ばして誠実に子どもに向き合っていないといけないと思っています。

上垣内 『幼稚園真諦』の場合は、社会文化状況の変化の中でもう一度保育理論として問い直すとか、今の時代のあり方からはどう読み取れるとかという議論が出てくると思うけれど、『育ての心』は普遍ですね。

本村 「こころもち」という文章。自分を振り返ってみてもずっと根底にあった言葉だなと今あらためて思います。「極めてかすかに、極めて短い」子どもの心もちというところを大事にしている先生は、良い先生ではなくて、有り難くてうれしい人、という言葉は温かみがあって好きな言葉です。

浜口 今日はどうもありがとうございました。

(2022年7月23日 Zoomにて開催)

1 注

2

「惣三会」については『倉橋惣三と現代保育』（フレール館2008年）p101～136参照。文中に登場する先生方の所属と肩書きは当時のものである。





保育の要諦

坂元彦太郎

1 倉橋惣三先生と附属幼稚園

三、戦後のこと

— 『幼児の教育』第64巻第11号

(1965年) から —

たいへん僣越であるが、私が直接に倉橋先生に

接したことについても、少しばかり語りたいと思う。私は、昭和二十一年三月、一教師より、文部省の青少年教育課長を命ぜられてから、先生との触れ合いがはじまる。私のしごとは、戦後の教育制度のたてなおしであった。そのとき、倉橋先生が私の室をたずねてこられ、懇意にして頂き、何かと教えてもらったのである。

たとえば、学校教育法の草案をつくるにつれて、特に、幼稚園をその中に加えることについて、相談にのって頂いた。幼稚園を学校の種類として、正規の教育機関の一部とすることには、文部省の内部の一部にも、また、外部にも反対の人びとが

あったが、先生はその意義を理解して、快く賛成された。そのとき、一部の反対をやわらげるために、外の学校を改名すると同じように、幼稚園を幼児園と改称する案も考えられることを先生にお話して意見をもとめたところ、「幼稚園という名前に、関係者たちの経験と伝統と熱情がこもっているのだ」とのことで、私も名前を変えないでいこうと決意したのであった。

昭和二十二年になって、保育要領を、小・中学校における学習指導要領と同じような意味でつくり出すことになって、倉橋先生をも一応わずらわすことになった。ところが、そのころ、アメリカの指導官として来任していたヘフナン女史は、アメリカにおける初等教育の大立物で、カリフォルニア州の初等教育局長をするくらいの人であった。同女史のサジェスチョンによって保育要領をつくることとなったのであるが、率直に打ち明けていえば、同女史と倉橋先生との間は、必ずしもなめらかなものではなかった。同女史はそう明な人で、すぐ日本の伝統などを理解してくれる

ようになったのではあるが、一口にいえば、両雄ならびたらず、といった工合で、双方ともが大物でありすぎたのであろう。

それで、保育要領の実際の執筆に当っては倉橋先生をわずらわさないで、山下俊郎氏その他の方々にやって頂いた、中には、里見静江氏などの厚生省関係の人をも含めた。この要領の骨子についてはヘファナン女史の示唆を受けたが、細部の執筆は全く日本人がやったものである。私は、この要領の中に、わが幼児教育の伝統、倉橋的な精神を盛りこむことにとめた。そして、私は、同書の第一章前書きを書いたが、そのいちばん最後の行に次のようにしるした。

「幼児のことに関心をもっている教師や保母や母親たちが心から幼児に対する深い愛情に燃え、幼児のために、天国のようにあたたかく楽しい環境をととのえようとする熱意にみだされていることが、いっさいの根本であることはいうまでもない。あなた方の清らかな愛情からわき出た献身が将来の明るい日本のいしずえを築くのである。」

わたしは、ひそかに倉橋的な文章で、それまでの先生の労苦に報いたい、といった気持ちもあって、このようなセンチメンタリズムをあえてしたのであった。

その保育要領を受けた、幼稚園教育要領もまた、決して倉橋的な軌道を踏みはずしたものでなかった。ことに、昭和三十九年度から実施された改訂幼稚園教育要領は、私とその改訂委員長となったため、倉橋精神の基本方向を保持するにまつたつもりである。

また、私は、倉橋先生が主事をされた、附属幼稚園の次の次の園長となって、先生がのこした生命に参与している。七年の園長生活のうち、ときどき、この幼稚園の姿のどことどことに倉橋先生が生きているかを考えてみる。

途中から乗船してきた私のような者は、船の重さをずしりと感じて、それを自分のかじで自由に動かそうとは思えないのである。むしろ、その情勢にのってそれを利用するなり身を任せるなりする外はないのである。

倉橋先生も、程度の差こそあれ、同じような感じをもたれたのではなからうか。語り草になっていることに、倉橋先生はよくこどもたちと遊ばれたが、身だしなみがきちんとしていてハイカラな先生に、幼児たちはそういうことをかまわずに先生にとびついてくるので、先生は先生方の助けをもとめて逃げてかえられたものだ、という。それもほんたであるうが、私の経験から察すれば、こどもたちの中にはどうしても入りこんでいけない一線があることである。というのは、こどもたちは受持ちの先生とかたく深く結びついていて、実際家としてのテクニクも備えていない園長とは、がまんができる間は遊んでくれるが、その限度がくるとなまからいびり出してしまふのである。私は、倉橋先生もよくこのことを知っていたのではないかと思う。したがって、また（論が少し飛躍するが）園の教育の実際や方向を自分の力で左右できるとは思っておられなかったことと思う。

端的にいえば、園の生命は倉橋先生だけでなく多くの人たちの汗と熱とを貪欲にむさぼりとして

育ってきたもので、そのどこが誰のせいであるかなど、はつきりしたものではない。すなおにそれ自身をまかせながら、時と場に応じて弾力的に対処する、これがまた、倉橋的な考え方ではないでしょうか。

倉橋先生が幼児を愛し、幼児教育に献身して、わが国の幼児教育の父と慕われるようにさえなられたことは、先生の心からの喜びであり、幸福であったことは、疑いのないところです。しかし、それと同時に、先生はいろいろな方面にすぐれたものをもっていて、たとえば芸術的な天分についてはすばらしいものがあつたと思われれます。先生がものされた樋口一葉研究が、山本健吉などの文芸批評家に絶賛を受けていることなど、あまり知られてないようですが、かえって、先生の魅力のもとでもあり、幼児教育の先達とあおがれるようになったのかも知れません。広く深い人間としての先生が、幼児教育に生涯を托することになってしまったことの運命を、どう考えたらいいでしょうか。

気持ち

いずみナーサリーで子どもたちと毎日を通り過ごすようになって2年目。今年度も1・2歳児クラスを担当しています。ナーサリーでは先輩の保育者と保育をしながら、『楽しい』の中で変わっていく子どもたちに触れ、私自身もその中に入っていくような経験をたくさんしています。そのような日々を過ごす中で、子どもたちの気持ちにも、自分自身の気持ちにも出合っているように感じています。

大きな紙

一日雨が降り続いてきたある日。保育室に

広いスペースをつくり、大きな紙を広げました。ころころと転がっていくロールから広がる紙に誘われるように、上を歩いたり寝転がったりする子どもたち。紙の下にもぐり込み始めた子どもがいたのを見て、私もふわっと紙を持ち上げると、紙の下に次々と子どもたちが入ってきました。中に入っては「ばあー」と顔を出し、またふわっと私の持ち上げる紙の下にもぐり込みます。持ち上げながら私の中に入ると、中に入っているAくん、Rくん、Iちゃんのにこの顔が。「ばあー」と紙を頭の上からずらすと、笑いながら思わ

浦木智子
(保育士)

ずごろんと寝転がって体をよじらせるAくん。それを見てあふれるような笑顔のRくん。Iちゃんは周りの紙にも埋もれています。もつともつと、という3人の表情に、何度も紙を持ち上げては、タイミングを見て横へずらし、「ばあ!」。繰り返すたび、体をくつつけあいながら紙の中で3人も私もごちゃごちゃとなつていきます。何も言葉は交わさなくても、なんだか楽しくて笑みがこぼれ、何度も子どもたちと一緒に紙に隠れてはその中から顔を出し、笑いあっています。



茂みの中で

今日は近隣の自然豊かな公園にお散歩に行こう、と出かけた日のことです。昨年度から何度もこの公園に遊びに来ているHくんが茂みの中に入り探検を始めると、それを見たIちゃんとNちゃんもついて来て、いつのまにかHくんの後ろに2人が重なって歩いていきます。茂みは周りを高い木に囲まれているのですが、場所によつては背丈の低い木もあり、トンネルのようにくぐったり、よけたりしながら歩きます。道があるようなないような中、通れそうな所をHくんと一緒に探しながら私も歩いていきました。どこかを目指しているというよりも、ただ歩いて進み、目の前には木々や葉っぱが、クモの巣が、でこぼこした土の山が、と歩くたびに景色が変わり、足元では土を踏みしめる感覚を感じます。自然の



中でどんなことを感じているの
だろう？ と、
夢中で歩いている
子どもたちの
姿を見て考えな
がらHくんのあ
とについていく
と、木の幹の陰
からひよこつと
顔を出すOちゃんと保育者の姿が。「Oちゃん
だ！」。少し離れていた場所で遊んでいた2人
に出会ったのでした。探検の先での思いがけ
ない再会に、笑顔で応えてくれるOちゃんと
保育者の姿に、なんだかとてもうれしくなる
子どもたちと私でした。

伸ばした手

歌を歌いながら、かえるになってジャンプ

をするのが好きなAくん。歌を歌っていると、
「かえるのうたやりたい！」とリクエストし
て、私と両手をつなぎます。歌を歌いながら、
ぴよんぴよんつと力強くジャンプ。そこへ、
「Iちゃんも！」と加わるIちゃん。私はI
ちゃんとも片方の手をつなぎ、「Aくんと、
Iちゃんの手をつないだらいいよ」と言うと、
そうつとIちゃんに手を伸ばすAくん。つな
ぎたいけれど、Iちゃんは？ というAくん
の気持ちが表示されているように遠慮がちに伸ば
された手。それを見て、Iちゃんは どうする
かな？ と私もドキドキするような、ぎゅつ
と胸が締め付けられるような気持ちで、片手
をAくん、もう片方をIちゃんつなぎなが
ら歌に合わせてジャンプを続けていました。
するとふいに、宙に差し出されていたAくん
の手を、Iちゃんがぱつと握りました。手が
つながって、気持ちもつながったかのように、
3人でリズムに合わせてぴよん、ぴよん、ぴ

よん。弾む体と、一緒がうれしくて弾む気持ち
ちが重なったように感じました。最後まで歌
うと「もういつかい!」。その声から、Aくん
のうれしい気持ちがあふれているようでした。

子どもたちと一緒に体を動かして遊ぶうち
に、気持ちも近くなっていくように感じるこ
とがあります。言葉でいろいろと考えていく
中で、もとにあった気持ちがわからなくなっ
てしまうことの多い私は、思わず気持ちがあ
ふれるような瞬間を子どもたちと共有してい
るように思うとき、子どもたちからたくさん
のことを教えてもらっていると感じています。

大きな紙の中で友達とくっついて笑いあ
っているとき、夢中で茂みの中を歩いている
とき、ドキドキしながら手をつなぎたいな、
と友達に手を伸ばしているとき……。その時
その時は、わからないけれど笑ってしまっ

いたり、気がつくと一緒に夢中になっていた
り、思わずぎゅっと胸が苦しくなったり、言
葉ではうまく説明できないようなことも多く
ありますが、そのような中で、無意識のうち
にとらわれていたことや、いつのまにか私だ
け先走り子どもとの気持ちがずれていたこと
に気づくことがあります。感じたことは曖昧
でわからないことも多いですが、わからない
なりに向き合ってみたり、同僚の保育者と話
したりしていくうちに、何日かたって、つな
がるような出来事があつたりもします。頭で
考えて言葉にできたことだけでなく、感じた
気持ちも、わからないことも自分の中にもち
ながら、子どもたちと一緒に体を動かして遊
び、自分なりに考え続け、日々子どもたちか
ら学んでいけたら、と思います。

パパ・ばあば・じいじの

育児日記(4)

—パパの巻—

by 保高一仁



心もとなりの記念日

今、手元に日記がある。A3サイズの用紙に印刷した手製のもので、20枚を束ね、端をクリップで留めている。1枚につき7日分の枠があり、それぞれに24時間の目盛が振られている。ここに、その日の母乳やミルクの量と時間、排せつの時間、睡眠時間、そのほかさまざまな記録を残すことができる。

息子が生まれて8日目から、私たち夫婦はこの日記をつけ始めた。例えばこんな具合だ。

5月26日(金) 14日目

6時…ミルク80ml、おしっこ／7時…うんち／8時…おしっこ、へその緒から出血／9時…市立病院に電話。マキロンを塗る。沐浴はOK／11時…ミルク80ml／14時…ミルク80ml、おしっこ／16時…おしっこ、沐浴／17時…ミルク80ml／21時…ミルク80ml／1時…ミルク70ml／5時…ミルク80ml

保高一仁 (ほたか かずひと)
女子美術大学アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
准教授。2児の父。

この日記をつけ始めたのは、不安だったからだと思う。それは、この子はしつかり育ってくれるだろうかとか、私たちは良い親になれるだろうかといった、将来に投げかけられる漠然とした不安ではない。その場、その瞬間に私たちを捉えてくる、「本当にこれで大丈夫なの？」という強烈な心もとなさだ。

一度に与えるべきミルクの量は、知っている。看護師さんが教えてくれた。健康なうちの色は、知っている。母子手帳に乳児の便のカラーチャートが付いていた。熱性けいれんを起こしたときの対処法は、多分知ってる。K2シロップは何日置きに与える必要があるのか、妻が乳腺のトラブルで苦しむときどこに相談するべきなのか、それは知っている。しかしそうした知識があっても、結局、私たちのさざめく心は鎮まらなかった。ミルクを飲み終え眠る息子が、ちゃんとげつぶをしたのか何度も何度も自問しながら、私も引きずり込まれるように眠ってしまうのだ。

8月26日(土) 106日目

6時…母乳／7時…ミルク80ml、おしっこ、点眼薬／9時…おしっこ／10時…母乳／11時…ミルク80ml、点眼薬／13時…おしっこ／14時…ミルク80ml／15時…おしっこ／16時…点眼薬／17時…母乳、ミルク80ml／18時…おしっこ／19時…沐浴／21時…母乳、ミルク80ml、うんち、点眼薬／22時…母乳

驚きなのは、人類は過去20万年以上にわたって育児を営んできているにもかかわらず、私は、なおも乳飲み子を前に戸惑っているという事実だ。何も、ここで不満を言いたいわけではない。ただ、わが子を抱いてみて、ようやく親の素養をかき集め始めている自分ののんきさに呆れたのだ。

この日の朝、息子が「おはよう」と言ったのを聞いた。私は慌てて妻に話したが、笑って取りあってくれなかった。それはそうだろう。おしゃべりをするには、まだ早い。

9月29日(金) 140日目

6時…母乳／9時…母乳／11時…ミルク80ml／14時…母乳／16時…母乳、ミルク80ml／18時…母乳／19時…沐浴／20時…ミルク80ml／21時…母乳／4時…母乳

バウンサーに揺られながら、息子が私に手を伸ばす。私がついている3色ボールペンに興味があるようだ。手渡すと、息子はそれを顔の前に掲げ、しばらくためつすがめつして、床に落とした。

息子をバウンサーから抱き上げ、膝の上に座らせた。私はボールペンを拾い、日記の余白に赤色でさかなを、青色でりんごの絵を描いてみせた。それから、もう一度息子にボールペンを手渡した。ペン先が、紙の表面をなでるように動く。かすかな線が紙に残る。私は「そうか、そうか」と言い、息子をかき寄せた。

10月3日(火) 144日目

6時…母乳／8時…母乳／10時…母乳、ミルク80ml

この日で、私たち夫婦は日記をつけることをやめた。当初私たちに日記をつけることを強いた心もとなさが消えたからではない。それは今も減じることなく残っている。ただ、その心もとなさを抱えたままの日々を、日常として受け入れることができるようになってきたのだ。きっと人には、どんな日々であっても、それを常なるものにしていく体力のようなものが備わっているのだろう。

13時発の特急に乗り、3人連れ立って妻の実家に行った。よく晴れた日だった。

11月2日(金)

息子539日目 娘1日目

娘が生まれた。

黒目がちな目を開き、世界をのぞいている。手を伸ばし、私たちに触れている。

4月1日(月)

息子690日目 娘151日目

妻の産後休が明け、私の育児が始まった。1年間だ。

仕事と育児。どちらかが一方の合間に収まることなどなく、渾然となって流れ込んでくるような生活を送る中で、引き続き夫婦のいずれかが育児に専念できる。

もちろん、私は子どもたちと過ごす時間がうれしかった。それに、ここで告白をすれば、育児の申請を出して、慌ただしく手続きや人事が進行し、私の手から諸々の仕事は離れていくことに、静かに解放感を覚えてもいた。妻は復職する。妻はこの時点で通算1年半近くのブランクがあった。ここから仕事の感覚を取り戻し、再びキャリアを積んでいくことになる。妻の通勤時のバッグには、新たに搾乳器と母乳の保存パックが加えられた。

ぼんやりと考えてみる。

実践

これまで幾億の育児を積み重ねてきた社会に生きながら、今もなお、「親」は私たちにとって全く新しく経験される。なぜだろう。

育児は、この社会全体が共有できる歴史として継承していくには、あまりにドメスティックな事柄だからなのか。あるいは、仮に育児の歴史はあるとして、それが陰って見えなくなるほど、今、私たちが経験している営みが鮮烈で、まばゆいからか。

ここまで書いてみて、ふと思に至る。

ひよっとして私たちが生きるこの社会は、そもそも「親」を定義することができないのではないか。そしてその中で、なおも私たちは「親」になろうとしているのか、と。

手探りで心もとない自らのありようを、まづ引き受けてしまうこと。

日記をつけることをやめた日を、私たち夫婦の「心もとなさの記念日」として、遅ればせながら祝いたい。



「育ての心」で語りあう

～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～

▶ Vol.8 保護者同士がつながれる場

この連載では、保育動画を囲んで、保育者、研究者、保護者、子どもに関心のある人、関心のあまりない人、いろいろな人が語りあっていきます。

今回のメンバーは5人です。杜ちやいど園の保育者である大竹さん、城田さん、保護者である平田さん、山下さん。そして、研究者である久保健太です。全2回、本号は2回目です。

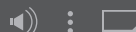


「園庭 1」



「ぐんぐんカーニバル」

(構成：久保)



つながれる場

久保 杜ちやいど園でやっている「パパパワールランド」というのは？

大竹 あるNPO法人が「人力遊園地」というのをやっていて「それをやってほしい！」って、平田さんにお願ひしたら、なんと！「パパパワールランド」なんてすてきな名前になってですね。それで保護者のお父さんたちを集めて、その人力遊園地をやってくれたんですよ。やったのはいんどだけど、すごく疲れちゃって、懲りちゃった人もいて。(笑)

平田 パパが活躍する場ってなかなかないです。その後にはプレイデー(運動会にあたるもの)でもパパで動いたりして。やっぱりそうやって1個のものを乗り越えると、かわりやすさみたいなのは出てきますね。

山下 つながりを求めているパパも多いですよ。

大竹みどり 杜ちやいど園(神奈川県横浜市)園長。
平田真大 杜ちやいど園保護者。
久保健太 大妻女子大学家政学部児童学科専任講師。

城田 龍 杜ちやいど園保育士。
山下晃平 杜ちやいど園保護者。

平田 そうなんですよ。なので、その壁を突破してあげるといふか、言われたから行くよ、というようなスタンスにしてあげる。

その入りやすい環境っていうんですかね。大人になると子どもみたいに、さっととはならないから。(笑)

山下 考え方、みんな違いますからね。距離感あんまり気にしない人と、気にする人と。

平田 そのの尺度がいろいろありますからね。

城田 大人は特に肩書きを気にする人が多いから、それを取っ払っちゃえば、人として話せるんですよ。そのきっかけをつくる作業、いわば肩書きを取る作業を、平田さんは大事にしてくれているから、「平田さんだったら行くよ」って人も多いだろうし、「平田さんになら頼める」ってこともあると思います。

平田 そこは同じ「親だから」っていうところを強調するしかないかな。やっぱり仲良くなるにはどこかしらの共通点を探りながら。

だから子どもに帰れるのかもしれないですね。それで子どもを楽しませたという満たされた感もあって。一人では楽しませられないですけど、みんながだったらあれだけの人を楽しませられるという自信につながるというか。

大竹 小学校に行くとなかなかつながりがないにくくて、だからこそ、この中でつながりをつくってほしい。ここでつながりをもって、何かあったときにそこで聞けるとか、そういうのって保育園の役割なのかなって。

かさまの杜(姉妹園)では、「一日保育士体験」っていうこともやってもらってたんです。そうすると、参加したお父さんたちは「すごく良かった」って言われる。「しこたま疲れました」はもちろん最初。「もう帰りたい」って言っていたり、昼に帰るお父さんとかもいて、「また起きた頃、来ます」なんて人もいたり。

平田 それって面白いですね。ここの施設をお借りして一緒に遊べるというのは。普段の保育の様子をどうしても見られないので。

大竹 皆さん見たいんだよね。やつぱりね。

平田 他の子とのかかわりをね。動画じゃなくて、のぞくような。

久保 わが子を見てても、園でのほうがお利口さんなんですよね。家だと、きょうだいげんかばっかりしてるんですよ。だけど、園にお迎えに行ったときなんかは、他の子も交えたりして仲良く遊んでいて。先生方に何うと、「今日は〇〇を手伝ってくれました」とか、「落ちていた〇〇を拾って畳んでくれました」とか、とか、そういったことを伝えてくれる。家とは違って、園では立派にやっているんだというのを聞いて、安心できます。

城田 わが子の様子を保育場面の動画で見ても、現場の空気感を味わうことには勝てませんよね。動画では、場面を見ることはで

きるけど、場面を感じられない。その場に居れば、「いろいろな出来事が到来して、保育場面が動いていくんだなあ」ということがわかる。やつぱり子どもと同じ場で感じてみるっていうのは大事なので、ぜひ、そのような機会を設けたいですね。そういう話はしょっちゅうしているのですが、やつぱりコロナ禍が……。セパレートするのが正義みたいな風潮が強くなって。

つながるきっかけづくり

山下 園で作ってくれたカレーを園庭で食べるってやりましたよね。コロナで集まらないけど、やろうって。あれ、すごい人数集まりましたよね。

大竹 130人くらいね。

山下 その中には意外な人がいたのかな？

大竹 そうなんですよ！ 意外な人が「手伝います！」って来てくれてうれしかった。

城田 中には配膳を手伝ってくれて、卒園児のお子さんに配るのを任せて、「持っていつて！」ってやってくれるご家庭もあつて。席も家族ごとにしなくて、もちろん家族ごとのこじんまりとした場所もあつたんですけど、10人掛けとかのテーブルも用意して。

久保 そうすると相席になった家族同士、交わらざるを得ないですよ。

城田 そうそう。子どもがこぼしたら「あっ」って言いあつたり。そういうのも見られたりして、面白かつたですね。

大竹 カレーのイベントは、ずっと「やりたい、やりたい」って城田さんと言っていたのね。それでも、なかなかできてないことがいっぱいあるんですけど。

城田 1個、形になりましたね。それも、保護者の方の実家が農業をやっていて、そこからジャガイモとかを大量に持ってきてくれたりして。職員の方でも、大竹さんと僕が2人

で突発的に企画したのに、片付けとか、手伝いに率先して入ってくれる人がいたり、普段の保育では知らない、意外な一面が見られたり。

大竹 本当に意外だったね。片付けがうまく思ったら、居酒屋でバイトしてらつて。

園として何かをするって考えるときに難しいのが、参加してくださる方はいいし、「私はいいわ」って言っている人もいいんだけど、そうじゃなくて、参加している人の周囲にいる人。

平田 入りたいけど……みたいな人ね。

大竹 この人たちが疎外感みたいなものをもつてしまうと「アウト」なので、そこが難しいところですね。

城田 そういう人はグイッてこつちが引つ張つてしまうと、逆に遠くなつてしまう。加減が難しいですよ。

大竹 その気持ちの碎き方って課題だよ。

そっちにも気持ちに向けておかないと。

久保 それぐらいの距離感の人が、カレーだったら足を運べたって感じなんですか？

大竹 そうですね。コロナのこともあるので、来そうな人が来ないって場合もあったかな。だからいろんな会をやるのが本当はいいのかなって思うんですけど。

山下 そういうときの基本って、キャンプのときもそうなんですけど、要は、淡々と継続的に企画を立ててみんなに発信していただくっていうのを心がけています。来られる人だけ来てくれればいいって。1回行かなかったから行きづらくなっただっていう空気感を出さないようにね。ちよっとお茶飲んで、みたいなレベルの5分、10分企画から、ガツツリなものも含めてあれば。人によってタイムイングとかもいろいろあるじゃないですか。仕事に忙しいとか。

大竹 だから昨年度、城田さんがここでたき

火をやってくれていて、そこで、お茶していきませんか？ とか、マシユマ口焼いていきませんか？ とかやると、案外ね。おとなしい方も「いいんですか」って言ってマシユマ口焼いていたりして。その積み重ねかな。

多様な人とかかわれる規模感

平田 普段仕事をやる上で、初対面の人とどうかわかっていくかっていうところを結構考えています。

大竹 それって保育園でも重要ですよ。

久保 今、平田さんがおっしゃったことは、組織論の中でも第一歩のところが必要なんですよ。

平田 やっぱり対面がいいってなったときにコロナ禍になって、会えなくなっただ。じゃあWEB会議ではどうやるのかって。

久保 平田さんも普段の仕事は、計画性や緻密さを求められる仕事ですよ。保育の仕事

は逆に曖昧さが必要な仕事ですよ。役割分担も、明確にし過ぎるとうまくいかない。

大竹 確かに。保護者の方はどちらかというと、平田さんのような業界にいる方が多いのに、杜ちゃんいると園はそうじゃない。もうちょっとと保育園側もちゃんとしなくちゃいけないですけど、なんせ、ちゃんとが苦手、私が。

平田 普段の仕事は、仕事の規模が大きくて、役割分担が明確過ぎて、やる人にしか仕事が行かなくなっちゃうし。悩ましいですね。

大竹 どこも規模感なんだね。

久保 役割分担の明確さと曖昧さを時と場合によって使い分けるためには、規模感ってすごく大事なんですよ。

山下 僕が以前勤めていたところだと、急に従業員が増えて、50人を超えると急にマネジメントのやり方が変わるんですよ。要は哲学が伝わらなくなったりして。

大竹 そうね。哲学が伝わらないってあると思う。保育園の組織も、保育園だけじゃダメだと思っていて、いろんな職種とかかわることが大事だと思う。

平田 そっちのほうが言いやすいですね。

大竹 そうなの！ 相談しやすい。

平田 なかなか言えないことが言えたりとかありますからね。

大竹 だからね、保護者の人も、もつとつながらるといいんだけど、あんまりつながった感を出してしまうと、そこに入っていない人たちが疎外感をもってしまう。それは申し訳ないので、そこら辺をどうしていくかっていうのがね。園としては課題。

城田 山下さんが先ほどおっしゃっていた、一回一回を小さく継続的にやっていく、というのが鍵かもしれないですね。

(2022年4月16日杜ちゃんいると園にて)

— 終わり —

単身赴任世帯の子育てについて

八田 剛

(システムエンジニア)

子育てについての書籍や雑誌を見ると、「両親で家事・育児を分担」などのワードを目にすることは多いが、「父・夫としての時間が少ない単身赴任の人はどうすればいいのか」と感じる。さまざまな意見はあると思うが、触れられることが比較的少ないであろう単身赴任世帯の子育てについて述べる。

単身赴任の経緯・状況や家族構成

私は、大学を卒業し、システムエンジニア（SE）として地元の企業に就職後、東京へ配属になり以降は東京で働いている。

妻とは同郷で、現在子どもは2人いる。しか

し、仕事が忙しく帰宅が連日深夜になり、休日出勤も多かったこと、妻に何かあったときに頼れる人が少ないこと、石川県への転勤の目処が立ってきたことから、上の子が2歳で下の子が生まれる前に妻と子どもが先に石川県に帰り、単身赴任となった。

単身赴任以降は、2週から3週に1度のペースで週末に石川県へ帰省していたが、コロナ禍でその回数もさらに減少した。

単身赴任の子育てで重要だと感じたこと

単身赴任世帯の子育てで最も重要と考えているのは、「配偶者の思いや悩みをどれだけ傾

聴できるか」である。

当然、単身赴任者は子育てに参加できる時間が限られており、結果的に配偶者への育児に対する依存度は上がるため、配偶者の育児に対する割合が大きくなる。

私の場合、お互いの実家の近くに妻と子どもは引っ越したため、周囲の方から「近くに実家があるし頼れるからよかったね」と声をかけられることもあり、私もそう思っていた。

しかし、現実的にすべてを実家に頼れるわけではない。実際に義母は子どもが大好きな方ではない。実際に生まれたときも1か月同居してくれていたこともあり、子どもも「ばあば大好き」とよく言っている。そんな素晴らしい義母であったとしても、妻の思いとしては、できれば夫に任せたい・相談したいことも当然あった。

そんな時、単身赴任ではすべてを対応できないため、負担はすべて妻にいき、「ワンオペ育児」となる。ただ、周囲からすると「ひとり親家庭でもないし、近くに実家もあるから大丈夫」

ということと「1か月間のほとんどがワンオペ」という状態が正確に理解されず、周囲と妻の温度差があった。

ひとり親の世帯もあり、すべてを自分でこなしている方も大勢いる。しかし私たちの場合、「夫がいるのに単身赴任で手伝わってもらえない」というジレンマから余計なストレスが生じた結果、家事・育児に対する余裕がなくなり、妻から笑顔が消えた。特にコロナ禍で帰省する回数が減ったこともあり、私は妻からのSOSに向き合えていなかった。

幸いなことに子どもの通う幼稚園の先生方が妻の異変に気づき、いろいろな相談に乗っていただいただけでなく、私がどう対応すればよいかなど真摯に教えていただき、状況は改善された。

子育てにおいて、子どもとどう向き合うかに注目が集まるのは当然であり、私も子どもとの時間をどのように確保するかを優先的に考えていたが、子どもに一番向き合っている家族への理解・共感が重要であると考えさせられた。

毎日家族と顔を合わせていれば些細な変化にも気づくかもしれないが、直接顔を合わせる機会の少ない単身赴任であるからこそ、毎日ほんの少しでもよいので、一番子育てを頑張っている配偶者の思いを聴くことが最も重要だと考える。

単身赴任中の子育てについて

私が「短い時間で子育てに参加するにはどうすればよいか」を考えた結果、どんなことでも子どもに「一緒にやってみる？」と言うことにした。

これは、子どもとの時間を可能な限り確保するというだけでなく、子どもと一緒にさまざまな体験をすることで、子どもの感性を豊かにすることや、体験の中で発生した課題をどう解決していくかを学ぶことができると考えているからである。

単身赴任では子育てに参加する時間が短いので、子どもと一緒に何かをする機会が限られる。そのため、子どもから誘われたときだけでなく、

子どもが楽しくないかも、ということでも、とりあえず「一緒にやってみる？」と声をかけている。断られることもあるが、草むしりや掃除などでも自分なりの楽しみ方を見つけ、それを私に伝えてくれるところから会話が発展し、「こいうやったらラクにできるよ」と教えてくれたり「どうやったらパパみたい早くできるの？」など感想や課題を共有する時間が増えた。

子どもと接する時間が短いからこそ、一見子どもが楽しくないかもと思うことでも一緒にやってみて、子どもの思いを共有する回数を増やすことが重要であると考えている。

その他、子どもと密度の濃い時間を過ごすことができていると感じるのが「もの作り」だ。私が子どもの頃からもの作りが好きなこともあり、子どもと一緒にいろいろなものを作るが、子どもと一緒に何かを作るときは、極力口出しをせず子どもが自分で考えて作り、困ったときや危ないときに手助けすることを意識している。

また、困ったときには、「身近にあるもので

解決できないか」を考えさせるようにしている。以前、段ボールで秘密基地を作ったとき、段ボールが不足し屋根の一部が作成できないという問題が発生した。子どもは「新しい段ボールが欲しい」と言ったが、「段ボールは無いので他のもので代用ができないか」を一緒に考えた。その結果、子どもから「新聞紙とか折り紙でも屋根できるよね？」と提案がありカラフルな屋根の秘密基地を作ることができた。

このように課題も子どもと共有することで、子どもと密度の濃い時間を過ごすとともに、ものの作りを通して、感性を豊かにすることや、クリエイティブな発想で問題を解決、想像を形にする方法を身につけるきっかけになればよいと考え、もの作りを行っている。

当初は「短い時間でどうやって子育てに参加するか」を目的としていたが、子どもと一緒にやってみて感想や課題を共有することで、子どものかかわりを濃くするだけでなく、子どもものの感性や課題解決力を磨くことで、現在

の初等中等教育で推進されているSTEAM教育のA (Arts) の土台となる。

技術教育を学び、SEとして働いている中で感じることをして、もの作りだからといって工作や絵画などにこだわる必要はなく、現在の小学校でも行われているプログラミング教育も、自分の思ったプログラムを作るという「もの作り」である。自分が思った通りのものができたときの喜びは工作もプログラミングも変わらない。親子でその喜びや発生した課題を解決することで、子どもとの時間をより密度の濃いものにするだけでなく、教育にも活かすことができるのではないか。

終わりに

コロナ禍でテレワークなど働き方が大きく変わったが、業種によってはテレワークでは対応できず、単身赴任となっている家庭もまだまだあるため、単身赴任の一例として捉えていただければ幸いである。

国境を越えた保育の学び in ベトナム

松本雄一

戸田雄介

(認可保育園園長)

日本の保育を伝えにベトナムのハノイへ

日本の保育を学びたいと思っっている人がベトナムには多くいます。そんな中、日本の保育を「保育所保育指針」「保育者論」「食」「5領域」等を基に研修会を通して伝えに行きました。

受講者は、現役の保育者、これから保育園で働こうと思っている学生、保育に興味のある社会人などさまざまでした。

研修は2週間にわたって行われ、僕たちは後半の、「言葉」「表現」「人間関係」「環境」の講義を任されていました。いざ講義がスタートすると、受講する人たちのスタイルはさまざま

でした。遅れて来たり、途中で退出したり、スマートフォンを見ていたり、電話したり。日本では注意を受ける場面かもしれませんが、ここはベトナム。お店の店員さんがスマートフォンを見ながら仕事をしている場面もよく目にしましたので、そんなスタイルは当たり前なかもしれないと思いつつ講義を進めていきました。

講義中、大きな壁として立ちはだかつたのが、通訳を通しての進行。僕たちが話して、通訳話してまた通訳の繰り返し。なかなか思うように進まなかったり、わかりやすい言葉を選んだりの試行錯誤。決してスムーズとは言えない講義でしたが、皆さん講義が始まると真剣なまな

松本雄一（まつもと ゆういち） グローバルキッズ日吉五丁目園。
戸田雄介（とだ ゆうすけ） グローバルキッズ戸塚吉田町保育園。
日本の保育をベトナムに伝えるアドバイザーとして、ベトナム関連事業に携わっていた（現在コロナで休止中）。



ざしで話を聞いてくれました。講義の途中でわからないうこと、気になることは質問してきたり、たくさんメモをとったり、集中して僕たちの話を聞いてくれました。

日本人との違いで驚かされたのは、「表現」の講義での、体を動かしてのレクリエーション。日本では恥ずかしがったり、あまり乗り気ではなかったりする人も多くいるのをよく目にしましたが、ベトナムの人たちは、講義を受けているというより、全力で本気で楽しんでいることをとても強く感じました。また、受講生の皆さんでアイデアを出しあって、ベトナムの劇をその場で披露してくれました。夏のベトナム。室内は扇風機と少し効きが悪いエアコン。室内でも

少し暑いくらいでしたが、汗をかきながら夢中になり楽しんでる姿に感動しました。

保育の世界でも、子どもたちと本気で遊んだり、楽しんだり、話したりすることはとても重要なことです。あらためて子どもたちとの向き合い方について考えさせられる瞬間でした。

実はその後、受講生の数名は僕たちの会社に入社し、保育者として保育の現場に入りました。グループ園をいくつか変わり、僕たちがいる園にも保育者として現場に入りました。いざ現場に入ると、子どもとかかわる姿、仕事への姿勢の素晴らしさ。また、わからないことはすぐに聞いてきて、納得いくまでいろいろな質問を投げかけてくれました。彼女たちからは今まで行っていた園での疑問点などの相談もありました。「子どもとかかわり方に納得いかない」「この保育の流れに疑問点がある」等。話を聞いていると、本当に子どもたちにとってどうなのかと真剣に思っていることが伝わってきます。心から子どもたちのことを思っていることや、学びた

いという思いがひしひしと伝わってきました。ベトナムの人たちはすごく真面目で勤勉だと思いたことがあります、まさにその通りだと思います。その後、数名ベトナムへ戻り、現在もグループ園で保育者として働いているメンバーもいます。

国境を越え、子どものことで話しあい、学びあう。言葉の違い、文化の違いがそこにはあるけれど、子どもたちを思う気持ちは変わらない、むしろ、日本の保育者よりも強い思いを感じる、とても有意義なベトナムでの講義の時間でした。

ベトナムの保育現場事情を知る

講義の参加者に幼稚園の園長をやっている方がいたので、現場に連れていってもらいました。そこはベトナムでも富裕層の家庭の子どもたちが通う園でした。U字型の園舎は幼稚園のほか小学校・中学校が併設されている建物で、近隣には高層マンションが立ち並んでいました。

園舎の中はとてきれいな環境で、おもちゃ

等も十分そろっていました。園をぐるっと見せていただき、保育の様子も見た後はギターで歌いながら子どもたちと遊びました。話を聞くと、ベトナム語・英語・日本語の手遊びや体操を取り入れているとのことでした。日本へのあこがれももっているようで、日本人が来るといっただけで喜んでくれていました。1クラスだけに行くこと「なんでこのクラスだけ」と不満が出るとのことだったので3・4・5歳全員で40人くらいが集まって遊びました。日本の曲で有名な曲は？ と聞くと「大きな栗の木の下で」と答えが返ってきたので、まずは一緒に遊びました。いつもやっているようにやってもらった後は、「泣いてる栗の木の下で」「笑った栗の木の下で」などアレンジを加えて遊んでいきました。笑いは万国共通で、子どもたちも職員の方たちも大笑いで楽しんでくれました。その後はふれあい遊びでタッチをしたり、くすぐったりすると子どもたちにも火がついて終始笑顔でした。最後は手遊びとパネルシアターで盛り上がり、

20分くらい遊んで終了となりました。講義の受講生だった人が通訳に入ってくれたことで、流れもスムーズに行うことができ、心のつながりがもてた時間になりました。

今回は富裕層の家庭の子どもたちが通う園でしたが、ベトナムの保育全般を見ると、今の日本では見られないような形の保育をしていました。しかし、子どもたちと遊んでみると楽しさを十分感じてくれていて、文化は違えど変わらない姿があって安心しました。

貧富の差はあるが温かい国

ハノイの街並みを見ると昭和の日本のような風景が広がっています。道端で空心菜を切っていたり、椅子を並べてお茶をしていたりと、どこか懐かしさも感じる雰囲気でした。バイクで有名な国ですが、クラクシヨンの音が鳴り響いています。なぜあんなに音を鳴らしているのかを聞いたところ、「ここを走っているよ」という合図なのだそうです。歩行者に対する思いや

りがあるんですね。繁華街には大きなデパートもあります。少し外れた所では井戸端会議のように椅子とテーブルがそこら中に置いてあって、近所の人同士で会話を楽しんでいる姿がたくさん見られました。そこには人と人とのつながりの深さがあり、温かさを感じる光景でした。日本は人と人とのつながりが希薄になってきているので、大事なことを思い出させてもらえたひとときとなりました。



鎌倉おもちゃ屋物語

くろすかずきよ

その16

面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ!

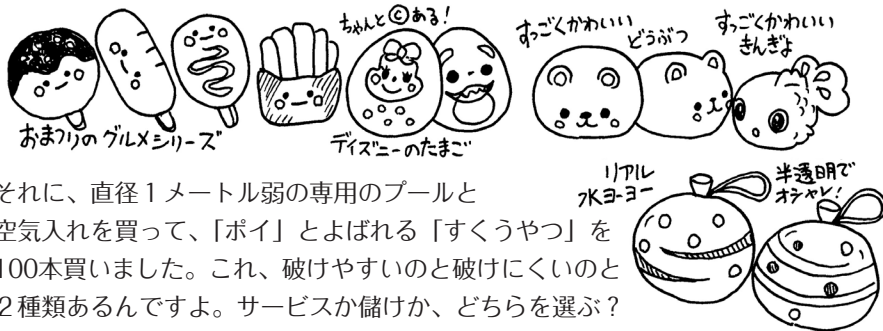
なっ
まつり
やり
ましょ!



と、大アップでシーちゃんが提案。
「うーん……おもちゃ屋の夏祭りって？」
高校の文化祭みたいに素人がやるたこ焼きや
焼きそばの店が並んでいるのしか思いつかない。
花火は夜だから5時閉店ではやれないし……

「おもちゃを買ってくれたお客さんに無料でスーパーボールすくい！」
「スーパーボールすくい？ ああ、あれね」。私の子ども時代にあったのは金魚と水風船ヨーヨーぐらい。水に浮かんだスーパーボールをすくうのは、割と新しい縁日文化なので実は私は未体験なのでした。面白いんかなあ？ と疑問符のまま、とにかく教え子の夢をかなえる「言いなり先生」は夏祭りをやることに決定。

名古屋のおもちゃ問屋で、いつもはスルーする水遊びグッズの商品棚を散策。するとスーパーボールと別に「おもちゃすくい」っていうジャンルがあるじゃないですか。あ、これのほうがビジュアルが楽しいぞ。ソフトビニール製の小さいキャラクターおもちゃで下に笛が付いていて、押すとキュッキュッと鳴くやつです。気に入ったのがこの5シリーズ。



それに、直径1メートル弱の専用のプールと空気入れを買って、「ポイ」とよばれる「すくうやつ」を100本買いました。これ、破けやすいのと破けにくいのと2種類あるんですよ。サービスか儲けか、どちらを選ぶ？

そして7月、いよいよゆうほや夏祭り！ 売り台にも夏の商品並べます。

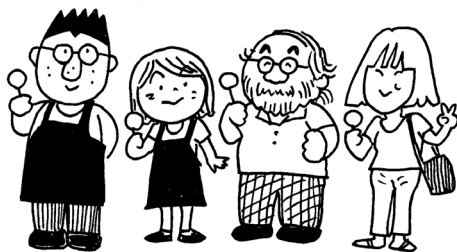


黒須和清 1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇
を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修
会講師の仕事などで忙しい。

リアルスイカのビーチボールを上から吊って、シーちゃんが作った長過ぎてズン垂れた盆踊り提灯の飾りを張って、店の前、ひげだるまオーナーの喫煙所のベンチをずらしてプール置いて水入れて、おもちゃ投げ込むと、わー！ なんかワクワク！ ひげだるまオーナーとキントトさんもやって来て

「鎌倉おもちゃ屋物語」出演メンバー4人が初めての勢ぞろい！
さあお客さんいらっしゃーい！

破けにくいポイを買ったのに、オーナーもキントトさんもだいたい3個すくうぐらいで穴があく。なのになんと20個ぐらいすくう、不思議に上手な少年！ なぜ？ ……と思えば、1個すくえばそれで満足の子。なぜ？ 取れるだけ取りたいものじゃないのかな？



おもちゃすくいやりたくてお義理におもちゃを買いに店に入るのもよし！ 子どものようにはしゃぐ彼女のポイが破けたら、彼女のためにマジですくいだす彼氏のほほ笑ましさ。いいなあ。いろんなドラマがあってオーナーもキントトさんもニコニコと帰っていきました。あっという間に閉店時間。

「たのしかったあ！」「やっぱやってよかったね」
「あーねむくなっちゃったあ」

電池が切れて突然寝ちゃったシーちゃんの横で考える。
そうか、おもちゃ屋は商品としてのおもちゃを売るのではなくおもちゃの楽しさを売るのがだな。
楽しいことはすべておもちゃなんだ。
おもちゃ屋は「楽しいこと屋」なんだな。
だからこういうのもアリ！ 来年もやること決定です。



その後の検証でわかったすごい秘密。
大きめのおもちゃ3つを三角になるように同時にすくい上げると、ポイのフッカの上3点で安定して、なんと紙が破けた後でもすくえるのですよ！ 20個すくった少年はこの秘密の技を知っていたのかも。

- 11) 倉橋惣三 (1932) 「ひっこし (移転を前にして)」 幼児の教育、32巻12号、p. 24 傍点は原著者による
- 12) 今泉飛鳥 (2014) 「関東大震災後の東京における産業復興の起点——人口と労働需要の動向に着目して」 社会科学論集、142、pp. 155-178
- 13) 新庄よしこ (1932) 「おおい出のままに——東京女子高等師範学校附属幼稚園—— (移転を前にして)」 幼児の教育、32巻12号、p. 36
- 14) 日本幼稚園協会 (1933) 「講習会における質疑応答 ——速記——」 幼児の教育、33巻8・9号、pp. 123-171
- 15) 津守真 (1979) 『子ども学のはじまり』 フレーベル館、pp. 145-156
- 16) 津守真 (1980) 『保育の体験と思索——子どもの世界の探究』 大日本図書、p. 224
- 17) Adamo, S. M. G. & Rustin, M. (Eds.) (2013). *Young Child Observation: A Development in the Theory and Method of Infant Observation*. Routledge.

本研究は、Froebel Trust Open Call Research Grantの助成を受けたものである。



遊戯療法的な観点からは、子どもは遊びの象徴的な体験を通して、移行期の情動体験を心の中で消化し、成長の糧としていくことができると考えられる¹⁷⁾。もちろんこうした体験は、意図的な操作や意識的な計画によって引き起こせるものではない。遊びの体験はどこまでもその瞬間の充実によって成り立つものであるから、その内的意義はあとになって分かってくることも多い。しかし、子ども自身が遊びの中でそうした体験に取り組んでいるという視点を保育者がもつことには意味があるだろう。そのことが、子どもが遊ぶ内的な体験を尊重し、その発展を支えるかかわりを可能にすると考えられる。誘導保育の原点となる「旅へ」の事例からは、遊びを導く原動力としての体験とイメージ、思いを込めて子どもたちとかかわる保育者の姿勢について学ぶことができる。

- 1) 倉橋惣三 (1934) 『幼稚園保育法真諦』 東洋図書 引用にあたっては、旧字・旧仮名を現代のものに改めた。
- 2) 前掲 1) 第四篇扉頁
- 3) 新庄よしこ (1933) 「旅へ——東京駅から」前掲 1) pp. 177-207
- 4) 浅井幸子 (2009) 「東京女子高等師範学校附属幼稚園における誘導保育の成立過程——保育記録の語り口に着目して」和光大学現代人間学部紀要、2、pp. 29-45
- 5) 前掲 3) p. 177
- 6) 林仁忠 (1984) 「あそび・うそ・創造性」飯田真ほか (編) 『創造性 (岩波講座精神の科学 9)』 岩波書店、pp. 87-113
- 7) 新庄よしこ (1932) 「森の組 (五月の一週間)」 幼児の教育、32巻 6号、p. 38
- 8) 前掲 3) pp. 192-194
- 9) 西隆太朗 (2007) 「心理臨床における多者心理学の可能性について」岡田康伸・河合俊雄・桑原知子 (編) 『心理臨床における個と集団』 創元社、pp. 77-86
- 10) Fabian, H. & Dunlop, A. W. (Eds.) (2002). *Transitions in the Early Years: Debating Continuity and Progression for Children in Early Education*. Routledge Falmer.

研究に基づいて『真諦』を著した。同書は1933年の日本幼稚園協会夏季講習会において、倉橋が四百余名の聴衆を前に行った講演に基づいているが、49ページにもわたる質疑応答の記録からは、会の熱気が相当なものであったことが窺える¹⁴⁾。この講演は、「この幼稚園で見ていただければ分かるように」といった形で、園の実践に言及しながら語られている。倉橋と保育者が、理論と実践が融合する新たな保育論を協働して築き上げ、そして完成したばかりの新園舎の風景とともに満を持して打ち出したのが、ちょうどこの時期だったのである。

遊びを導くイメージとその意義

「旅へ」のイメージには、震災からの復興、旧園舎から新園舎への移行、旧来の保育を超えて新しい保育を子どもたちとともに創造する体験が、知らず知らずのうちに重ねられていたように思われる。それらはいずれも保育者と子どもの双方にとって重要な体験だった。津守眞は、誘導保育においては外的に表れた制作物などの成果以前に、子どもの内面的な体験が重要であり、それを触発するのが保育者の情熱と人間的なかわりなのだと論じている¹⁵⁾¹⁶⁾。外的側面から捉えるならば、一つのテーマに沿って動物園や水族館など、長期にわたって大がかりな制作物を完成させていくのが誘導保育であるように見えるし、実際にそうした実践例も数多くある。しかし新庄の記録からは、子どもたちの内的体験を濃やかに捉えて応答しながら、自らの思いを込めてかかわる保育者のあり方を見ることができるといえる。そのようなあり方は、外的に誘導保育の形をとるか否か、長期にわたる制作となるか否かを超えて、保育にとって根本的な意義をもつと思われる。

共同の遊びの中で、子どもと保育者は、ともにイメージを紡いでいる。そのイメージは、意識的な意図だけでつくられるわけではない。われ知らず心惹かれるイメージを追い求め、互いが思いもよらない着想を持ち寄り合う中で、遊びは事前の計画を超えた新しい発見と体験をもたらす。子どもが「夢中」になれる充実した遊びは、夜見る夢と同じように、意識のみならず無意識の過程を含んでいる。その無意識的なイメージが、「旅へ」に見られるように、かかわる人々にとって重要なテーマを担いうる点でも、遊びと夢は似ている。子どもも保育者も、それぞれが自分自身を込めてかかわる充実した遊びは、いわば共同で夢見る体験にも喩えられる。

イメージが生まれる背景 —— 移行の過程

創造は意識を超えた過程を経て生まれると述べたが、イメージにも無意識的な背景が想定される。精神分析やユング心理学においては、汽車のイメージは即物的な汽車だけでなく、その人の心にとって象徴的な意味を持ちうると考えられている。夢に現れるイメージの意味を読み解く際には、夢見た人がそのとき置かれている状況を参照することが一つの手がかりとなる。個人だけでなく集団においても、メンバーが共通に抱いている無意識の関心がイメージに反映される可能性が示唆されている⁹⁾。以下は一つの仮説となるが、この観点から「旅へ」のイメージについて考えてみたい。

このイメージが生まれたのは、関東大震災が起きた9月1日を目前にしたころだった。1923年、お茶の水の幼稚園も震災で全焼している。バラックの園舎で保育が再開された後、約10年を経て、1933年1月、現在の新園舎に移ることとなった。それは一つの移行期と捉えられる。入園期・卒園期ばかりでなく、登園・降園などの日常場面を含めて、社会環境やアイデンティティの変化を伴う「移行」の際には、子どもたちへの繊細な配慮が必要であることが知られている¹⁰⁾。この時期、子どもも大人も、新園舎への移行に向けて期待と不安を抱いたことだろう。「旧いところから新しいところへ、というよりも、なつかしみから希望への間をゆくひっこしの車には、荷物のほかにさまざまな思いの積まれることである」と倉橋は書き留めている¹¹⁾。このイメージは、旧園舎から新園舎へ、子どもと保育者の思いを携えた「旅」をも象徴していたように思われる。

移転は震災からの復興によって可能になった。復興に一区切りがついたのは1930年3月の帝都復興祭のころとされており¹²⁾、この事例はそこから2年半後のものである。一方で、1914年末に開業した東京駅は1920年代にも駅舎を拡張し、発展を続けていた。震災後に生まれた園児たちは復興の象徴とも言える。彼らは震災を直接には知らないが、発展する東京の様子を感じ取っていたことだろう。

「旧から新へ」といえば、園の保育もこの時期に大きな変化を遂げている。新庄によると恩物本位の保育から子どもを主体とする保育への移行は、大正6、7(1917-18)年ごろから震災後にかけて、「新旧相交わる過渡期」に生じたという¹³⁾。移行はちょうど倉橋の着任によって始まっている。彼はその後2度のブランクを経て昭和5(1930)年に園に戻り、保育者との協同

汽車のイメージに惹きつけられて遊ぶ様子を見てきた経験が、新学期を前にして東京駅のイメージが生まれた背景にあったと考えられる。日々無数に捉えてきた子どもの姿が、保育者の着想の中には自然と生きてくる。それも漫然と見ているのではなくて、外面的にはめっちゃくちゃ描きと見える線や、レールを指でなぞっているだけとも見える行動の背景に、「心の中には走りたるなるべし」という、子どもの思いと内的体験を繊細に見て取る感受性と観察眼をもっているからこそ、その着想が子どもに即したものとなってくる。細かな保育計画というよりも、まだ見ぬ「美事なる絵」のようなヴィジョンとして浮かんでくる点も興味深いところである。

遊びの器としてのイメージと保育者

事例「旅へ」において、イメージはきわめて多様かつ自由な遊びを受けられることのできる器となっている。大阪行きの汽車のような地理的広がりをもちつつ、食堂や売店など街としての有機的な発展もあり、コミュニケーションの媒体としても興味を引く電話といった道具立てもある。そうした多様さがあっても一つの遊び空間としての調和が保たれているのは、子どもたちと保育者の間でイメージの世界が共有されているからだろう。

たとえば、電話はもはや駅のものというだけでなく、「肉を百匁持って来て下さい」「バナナを一ちょう大急ぎで」といった台所のご用にも使われたのだが、保育者はそれも子どもらしい遊びとして受け容れ、関心を寄せている。普段なかなか口を開かない子が一人で電話口に向かっているときには、「大急ぎで私が片方になり電話でその子に話しかけて、思いがけなく話し合いの出来たこともございました」という。「今日サーカスに行きませんか、大急ぎでね」といった子どもたちの会話から、積み木の小屋を作って動物たちを踊らせる遊びも始まるなど、イメージの世界が、子どもたちのさまざまな可能性を実現することができるプラットフォームとなっていることが見て取れる⁸⁾。

このような「器」としてのイメージが機能しているのは、計画を固定したものとするのではなく、子どもたちが新たにイメージを広げていくことを受け容れ、子どもが心を開く瞬間を繊細に捉えて応答する保育者がいるからだと考えられる。一人ひとりを大切にかかわる保育者との関係性が、遊びの展開を支えている。

変えながら展開していった。それは一つの魅力的なイメージが、保育者と子どもたちの心を捉えたことによって可能になっている。ここでは事例の展開すべてを扱うことはできないが、その中でも遊びを導くイメージの役割とその意義について考えてみたい。

保育者の創造性とイメージ

事例の冒頭でまず印象的なのは、東京駅から広がる世界のイメージが、保育者にとって突然のものとして現れている点である。

夏休みの或る日、どういう続きあいで、そうなったのか、今はすっかり忘れてしまいましたが、とにかく幼稚園のことを何ということなく考えつづけて居りました時、ふと、あの東京駅の構内が眼に浮んだのでございます。そうだ、あの乗車口に一足はいれば、改札口がある、切符売場がある、荷物受付、自動電話、売店、郵便局、待合室、つづいて食堂、あの大きな時計、ポスターの数々。そう考えつきましたら、その中のどれでも保育室に結びつけて、先生と幼児との協同作業が、かなり長い間つづけられる様な気がいたしました⁵⁾。

新しい着想を得た喜びと、新学期の保育に向かう期待をたたえた記述である。創造的なアイデアは、理詰めで生み出せるわけではない。それは意識を超えた過程によって、準備期、孵化期を経て啓示のように現れるものだと言われるが⁶⁾、休暇中もあれこれと新たな保育のあり方を考え続けている保育者だからこそ、このように全体性をもったイメージが生まれてくるのだろう。

といっても、この着想は子どもを離れた個人的な思いつきなのではない。これに先立つ一学期、新庄はこんな場面を記録している。子どもたちが電車の絵を描き始めたのでチョークを手渡すと、黒板にいろんな色の線を引いた。「ここは停車場、ここはトンネル」などと言いながら描く。自分が電車となって走っており、線はそのしるしのような。「二三人で走るのかくはめちやめちやに見ゆれどやがてこの一線が美事なる絵となるべきはじめと思われたり」。大きな紙に線路と電車の絵を描いた子もいた。「この絵の前に立ちては人さし指にてレールを撫でたる子四五人を見かけたり。心の中にては走りたるなるべし」⁷⁾。

倉橋惣三と「誘導保育」

子どもたち自身から生まれる行為と意思を大切に保育の中で、保育者の計画やカリキュラムはどう捉えられるだろうか。古くて新しいこの問題に、保育学の開拓者、倉橋惣三は「誘導保育論」によって取り組んでいる。彼は東京女子高等師範学校附属幼稚園（「お茶の水の幼稚園」と呼ばれる）の保育者たちと協働し、『幼稚園保育法真諦』¹⁾（以下、『真諦』）においてこの新たな保育論を提唱した。子どものありのままの生活と自由な遊びを尊重しつつ、そこに一つのテーマを提示することによって、系統性を与えていくというのである。

誘導保育は倉橋の保育論を特徴づけるものとして議論されてきた。その多くは理念的な議論であって、具体的な実践はあまり扱われていない。しかし先述の『真諦』に収録されたものなど、当時の誘導保育の記録を見てみると、保育者によって誘導保育の理解も実践もさまざまであることが窺える。子どもたちの想像力を生かして臨機応変に対応する保育者もいれば、かなり積極的に指示を出している保育者もいるのである。これらの記録に倉橋は、「教育は、考えてばかりいては解けぬところがある」という言葉を寄せている²⁾。彼が言うように、誘導保育への理解は、理念を超えて実践を見てみることによって深められるだろう。

「旅へ——東京駅から」の事例

誘導保育の内実を見ていく上では、とくに新庄よしこによる「旅へ——東京駅から」と題された事例が示唆的である³⁾。倉橋は『真諦』の中で、誘導保育の具体化としてこの事例に何度も言及している。子どもたちから生まれる遊びの展開や、保育者の応答について具体的に記している点も特徴的である。当時の保育記録における「語り口」に着目した浅井は、新庄以外の保育者らによる記録が、主として製作の材料や方法など、技術的側面の解説としての意味合いが強いことを指摘している⁴⁾。これに対して新庄の事例は現代の読者にとっても、保育記録を読む楽しみを与えてくれるものとなっている。

「旅へ」の誘導保育は1932年の9月、年少4歳児のクラスで始まり、翌年末まで続いている。東京駅を保育室の中に再現しようと保育者が提案し、そこから子どもたちが創意工夫を加える中で、さまざまな遊びが広がり、形を

遊び・イメージ・関係性（1） 一 誘導保育の原点に見るイメージの役割と意義

西 隆太郎*

Play, Image, and Relatedness (1)

The role and significance of images in the origins of Yudo-Hoiku: the practice of a child-centered pedagogy in a Japanese kindergarten in the 1930s

Ryutaro NISHI

遊びの展開とイメージ・関係性

遊びとは、楽しく心惹かれるものであると同時に、奥深いものでもある。外からは同じことをしているように見えても、子どもたちはそれぞれに自分らしさをそこに加えて、遊びを豊かなものにしていく。したがって体験は一人ひとり個性的なものでもあるが、しかしまったく個別的でばらばらなわけでもない。直接的に言葉で説明しなくても、子どもたちは何らかのイメージを共有し合っている。相互的で即興的ななかかわりの中で、遊びとそのイメージはつながり、発展し、変容していく。保育者はその過程の中に身を置きながら、子どもたちの思いを汲み、自分も遊びを通して応答する。そんな生命的でダイナミックな過程を創造し、ともに体験することは、保育の楽しみの一つであって、興味は尽きない。

遊びの展開には、子どもたちが心に抱くイメージと、それを分かち合うことのできる関係性が関連している。遊び・イメージ・関係性について、さまざまな事例を通して理解を深めていきたい。今回は誘導保育の古典的な事例を取りあげ、次回は筆者らが観察した現代のごっこ遊びを動画で示し、検討する。

* (にしりゅうたろう)

ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科教授。専門：保育学、臨床心理学。

『幼児の教育』 令和4年総目録

◇春号

時を超える言葉 松島のり子

倉橋惣三生誕140年

今また考えよう、倉橋の子ども学 1

家族が語る「倉橋惣三」

・座談会

倉橋和雄・倉橋耀子・倉橋麻生・

浜口順子・宮里晁美・久保健太

・「子供讃歌(11)」 倉橋惣三

10父親の旅 1 我が子の寫眞

(1949年) から

私の保育ノート 変えたことから考え

直す 灰谷知子

パパ・ばあば・じいじの育児日記(1)

ーパパの巻ー 池永憲彦

「育ての心」で語りあうー動画を聞んだ

DX時代のカンファレンスー2025

大人の願いと子どもの文脈

市川杏子・井口陽南子・

能登比呂志・伊垣尚人・久保健太

自然の中で生まれた僕の中の「文化」

浦中こういち

中国のチベット高原における森の幼児

園ー西寧市森林幼兒園を事例にー

盧中潔

鎌倉おもちゃ屋物語その13 黒須和清

認定こども園における夕方の時間の子どもと他者とのかわりー日中から

の変化に焦点を当てた事例分析からー

杉山沙旺美

◇夏号

子どもの目 浜口順子

倉橋惣三生誕140年

今また考えよう、倉橋の子ども学 2

倉橋の思想は今、どのような意味をもつのか

・座談会

久保健太・横山章介・山本一成・

水津幸恵・浜口順子

・「森の幼稚園(一)」 SK生

二、ガーデン主義

(1912年) から

私の保育ノート 子どもと大人一緒に

にいるけど何か違う。 城田龍

パパ・ばあば・じいじの育児日記(2)

ーばあばの巻ー 根波和子

「育ての心」で語りあうsois

好きなことに夢中になること

市川杏子・井口陽南子・

能登比呂志・伊垣尚人・久保健太

子どもたちの幸せについて 吉井盛悟

意味深い時間、ぜひたくな時間

トクマルシューゴ

鎌倉おもちゃ屋物語その14 黒須和清

災害時における子どもたちへの遊び支

援ー「遊び」を心のケアの第一歩と

してー 江尻彩葉

◇秋号

「遊ぶこと」と「研究」と 久保健太

倉橋惣三生誕140年

今また考えよう、倉橋の子ども学 3

倉橋の考えた環境に遊ぶ子どもたちの今

・座談会

高橋陽子・杉浦真紀子・灰谷知子・

谷地理沙・浜口順子

・「人形芝居の話ー幼稚園談話會講演の

大要筆記1」 倉橋惣三

(1930年) から

私の保育ノート 子どもの探究に寄り

添って 木村奈々

パパ・ばあば・じいじの育児日記(3)

ーばあばの巻ー 攪上久子

「育ての心」で語りあうsois

子ども同士が育てあうもの

大竹みどり・城田龍・

平田真大・山下晃平・久保健太

「物語」に新しい命が吹き込まれるー

「からだ・表現ワークショップ」から

村中李衣

小さな小学校の学校図書館から

藤津麻里

鎌倉おもちゃ屋物語その15 黒須和清

学内散歩における1歳児の出会いと経

験ー「まち」としての大学の教育環

境とのかかわりー 岡南愛梨

◇冬号

幼稚園の朝に思う 高橋陽子

倉橋惣三生誕140年

今また考えよう、倉橋の子ども学 4

保育を語り、倉橋の保育論を実践に

つなげていくー保育研究会「惣三会」

の歩みと今ー

・座談会

上垣内伸子・横谷厚子・新堀和子・

本村真弓・浜口順子

・「保育の要諦」 坂元彦太郎

1 倉橋惣三先生と附属幼稚園

三、戦後のこと

(1965年) から

私の保育ノート 気持ち 浦木智子

パパ・ばあば・じいじの育児日記(4)

ーパパの巻ー 保高一仁

「育ての心」で語りあうsois

保護者同士がつながれる場

大竹みどり・城田龍・

平田真大・山下晃平・久保健太

単身赴任世帯の子育てについて

八田剛

国境を越えた保育の学びinベトナム

松本雄一・戸田雄介

鎌倉おもちゃ屋物語その16 黒須和清

遊び・イメージ・関係性(1)

ー誘導保育の原点に見るイメージの役

割と意義 西隆太郎

『幼児の教育』 令和4年総目録

お便り

POST

◆私の「カルチャー・いんふお」◆

ハイヒールを履いたお坊さん

ミスユニバース世界大会等でメイクアップアーティストとして活躍する僧侶西村宏堂氏が上梓した『正々堂々 私が好きな私で生きていいんだ』（サンマーク出版2020）。表紙は、右半身はメイクをして革のコスチューム、左半身はノーメイクで黒い袈裟姿の彼です。幼い頃からディズニープリンセスが大好きで、風呂敷をかぶってロングヘアにしています。

幼少期の何気ない両親の言葉から、同性愛者と告げる勇気もせず、自分がストレートな男性でないことが誰かから両親に伝わることも恐れられました。進学した高校でも男女問わず友人ができませんでしたが、一方で両親を説得するために英語力を磨きます。念願がなあって留学し、自由に見えたアメリカでも人種の壁などで苦労しますが、まず身近な女性にカミングアウトします。編入学したパーソンズ美術大では、ゲイである学部長や多様な学生たちに接し、ついには日本帰国時に「アメリカで紹介したい男性がいる」と両親に打ち明けます。浄土宗の僧侶で大学の仏教学教授の父は、日本で僧になるための修行を始めるながらも自分の僧としての存在に疑問を感じる息子に、「好きなように生きろ。お坊さんは時代によって変わっていく。時代に合った教えや考え方でなければ誰かを救うことはできない」と話します。また極寒の京都での修行中も、指導僧は「浄土宗の教えではどんな人も平等に救われる。作法は教えの後にできたものだからこだわる必要はない」と、自らを着飾ることが好きな彼を勇気づけてくれました。彼は自分を押し殺して生きざるを得ない人々に「自分らしく生きていこう」と発信し続けています。（参考：NHK BS「ハイヒールを履いた僧侶」2022年6月再放送）（AK）

◆研究論文を募集します◆
ピアレビュー（査読）の上、掲載します。

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。

【テーマ】子ども、保育、幼児教育に関するもの

【文字数等】14,000～15,500字程度（日本語）。
（写真・図表、文献、注を含む）
本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。

【締め切り】随時募集します。

【送付先】本誌編集委員会

Mail : youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

◆年間購読継続手続きのお願い◆

いつもご愛読くださり、ありがとうございます。

次号春号からの年間購読を引き続きご希望の方は、更新手続きが必要となります。フレール館のホームページに入り、オンラインショップ「つばめのおうち」のパナーをクリック。その後、「定期購読」⇒「幼児の教育」の表紙絵をクリックします。

定期購読のサイクルは冬号で一区切りになります。ご不明の点などございましたら、youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。

おかげさまで今年も無事に4号をお届けすることができました。今後ともどうぞお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

（編集委員会）

◇「倉橋惣三研究会」をお茶大で開催しました◇

2022年9月3日(土) 10:00～12:00、お茶の水女子大学において「倉橋惣三研究会」が開催されました(本誌編集委員会共催、倉橋惣三協会後援)。コロナ禍の中、45名の参加があり、北海道、広島、愛知、新潟、大阪など遠方からの来訪もありました。

第1部では、大学本館306室において、惣三ゆかりの品が展示される中、スペシャルトーク(倉橋耀子さん、宮里暁美さん、浜口順子)、その後、保育者だけでなく園・学校の運営者、一般の方、研究者や学生など多様な参加者がグループに分かれて自由に語りあう交流タイムをもちました。時間いっぱいおしゃべりが止まらないほど盛り上がりしていました。

惣三ゆかりの品は、倉橋惣三協会会長である倉橋和雄さんのご自宅から運んでいただいたもので、直筆原稿、写真、『幼稚園真諦』の表紙に使用された東山魁夷の原画、欧米視察の際に海外からわが子たちに送った絵ハガキ、昭和2年に大連で購入したという象牙の麻雀牌、お孫さんが祖父を描いた惣三お気に入りの肖像画など、貴重な展示がありました。

第2部は、附属幼稚園に場所を移動して、園庭・園内を巡り、「はいれない子にも薫れや梅の園」と詠んだ惣三の書、人形劇用舞台なども特別に公開されました。

当日の様子を写真でご紹介します。(浜口)



▲倉橋和雄さんご挨拶(展示品の説明)



▲惣三が欧米から家族に送ったハガキ



▲東山魁夷の原画(左)と孫が描いた肖像画(右)



▲物三ゆかりの品を見る参加者



▲倉橋耀子さんトーク風景



▲交流タイム



▲附属幼稚園の園庭（第2部）



▲附属幼稚園の廊下（第2部）



編集後記

2022年度は4回にわたって倉橋惣三生誕140周年を記念した座談会を実施してきました。遠い昔にまなごしを向けたり、今、保育者として子どもたちのそばにいる自分を振り返ったり、これから生きる子どもたちを考えることで未来に想いをせたり、という機会になったのではないのでしょうか。

春号の座談会で話題に上った『倉橋惣三物語』（講談社 2021年）。この本の中でよく出てくるのは、惣三が子ども時代を過ごした浅草でのエピソードです。下町の子どもたちと笑ったり夢中になったり時には悲しみや悔しさも味わいながら過ごした日々。それらの記述から浮かび上がってくるのは「暮らしの風景」です。土埃の煙たさや売り買いする人々のにぎ

やかな声、家々の台所から漂ってくるおいしそうな匂い、赤ちゃんの泣き声。暮らしの風景の中には、これらのものが渾然一体となって存在しています。

倉橋惣三はそのような景色の中で過ごし、やがて子ども学を学び、現在の乳幼児教育の礎を築いていきます。私たちが今こうして子どもたちが育つ姿へまなごしを向け、保育の日々を重ねていられるのも、倉橋先生が指し示してくださった方向性のおかげだと私は思っていますが、その根っこに「浅草の暮らし」があることをとてもうれしく思います。

さあまもなく次の年度が始まります。「今」いるところを大切にしながら「明日」へと進む「幼児の教育」をこれからもよろしくお願いたします。(MA)

次号予告 幼児の教育 春号 2023年4月刊行予定

創刊122年。歴史を生かし「今」の保育をどうするか。

- ◇(新企画) 「巻頭インタビュー」(1) 秋田喜代美先生に聞く
- ◇(新連載) 「保育者と研究者が、一緒になって保育を描く」
- ◇(報 告) イギリス訪問レポート 杉浦真紀子(お茶の水女子大学附属幼稚園)

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 冬号 第122巻 第1号

令和5年1月1日発行
 編集発行人 / 浜口順子
 編集担当 / 田中恭子・根本智子
 発行所 / お茶の水女子大学
 「幼児の教育」編集委員会
 〒112-8610
 東京都文京区大塚2-1-1
 お茶の水女子大学
 浜口順子研究室内
 youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所 / 株式会社フレーベル館
 電話 : 03-5395-6604 (編集)
 振替 / 00190-2-19640
 印刷所 / 図書印刷株式会社
 定価 / 968円 (本体880円+税)
 ©お茶の水女子大学「幼児の教育」編集委員会
 2023 Printed in Japan 無断転載禁止
 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員 / 久保健太
 高橋陽子
 中澤智子
 松島のり子
 宮里暁美
 お茶大3園合同研究会
 (附属幼稚園、
 いずみナーサリー、
 文京区立お茶大こども園)
 編集協力 / フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613 (営業) ●

